

## 『教育界』に連載された「教育茶話会記事」(1)

### はじめに

教育茶話会は、1905（明治38）年2月11日に第1回が開催され、1910（明治43）年7月11日まで45回開催され、金港堂が発行する月刊誌『教育界』の第4巻第5号から第9巻第10号に誌上座談会「教育茶話会記事」として掲載された。牧口常三郎も会員となって第二回から参加している。

同会の発起人となった『教育界』の編集人である曾根松太郎（号は、金川）は、教育茶話会について、次のように述べている。

「明治三十八年の新春頃、予は教育茶話会の設立を思立つてゐた。それは、教育に關して趣味を有してゐる各方面の人々が相會合し、教育上の問題について、名の如く互に茶話を試みやうといふのが、その趣旨であつた。それで同年二月二日先づ此のことを佐々、樋口兩君にはかり、ついで、矢野太郎、山本信博、棚橋源太郎、寺家村和介、松田茂、佐々木吉三郎、立柄教俊、阿部莊二、市川源三諸君に説いて皆賛成を得た。同九日矢野君が見えて共に茶話会の規則案を作成した。其の時、同君より初會を紀元節に開會しては如何との意見出で、急に通知狀を發送したりして、二月十一日第一回を樋口君宅で開會し、前記の諸君が揃つて出席された。そして愉快に種々教育上の意見を交換して散會した。

爾来、毎月一回十一日に之を開會するを例とした。又、會員にはその後小谷栗村、牧口常三郎、石川半山、峯間信吉、藤原喜代藏、吉田升太郎、伊藤房太郎の諸君が新たに參加された。（中略）此の茶話会は、明治四十三年七月十一日第四十五例會を開催する迄繼續した。其の間、會員の交誼を暖め、同時に教育問題に關して相互の知識を交換する使命を遂行して來た譯である」（曾根松太郎氏教育奉仕三十年祝賀會編『無冠の栄光』、同祝賀會、1930年、240-242頁）。

この『無冠の栄光』において曾根は、牧口は新たに參加した中に入れられているが、最初に声がかかった一人と考えられる。なぜならば、曾根が『無冠の栄光』において、賛成者として名前を挙げたのは、第一回茶話会の参加者の名前であるが、彼はその席上で「缺席者數氏の氏名を報告」しているのである。参加者の一人山本信博が曾根から連絡を受けたのが前日の夜十時過ぎと述べているように、急な通知のため出席できなかった者が何人かいたのである。それは、誰であったか。全てではないかも知れないが、「新たに參加された」者の中にいると思われる。

「新たに參加された」者が第何回の茶話会から出席したかは、以下の通りである。（ ）は、最

初に参加した回を示す。

小谷栗村 (3)、牧口常三郎 (2)、石川半山 (2)、峯間信吉 (23)、藤原喜代藏 (30、「藤原冷泉」として出席)、吉田升太郎 (5)、伊藤房太郎 (21)

小谷栗村、牧口常三郎、石川半山、吉田升太郎の四人は、最初に呼びかけられたが、第一回を欠席せざるを得なかったのではないかと思われる。他に、第二回茶話会の筆記を担当した石川松溪も第一回に声を掛けられたが、病気で欠席したと述べている。

なお、本資料に関する解題は、次号以降に掲載することとしたい。(塩原将行)

### 資料凡例

- 一、原文は縦書きであるが、それを横書きに直した。
- 二、本文の表記により記載したが、旧字体（異体字、関連字）で記載できない漢字については新字体に改めた。
- 三、複数字分の繰り返しを示すおどり字は、ゝゝ、或いはゝゞ等と字数分表記した。
- 四、合略仮名、変体仮名は、現代仮名遣いで表記した。
- 五、誤字、誤植、脱字、誤記と考えられる箇所には（ママ）と表記した。
- 六、判読できない文字は、■と表記した。

『教育界』第四巻第五號

## 教育茶話會記事

給 仕 某

時は明治三十八年、我が戦勝國民が、無限の歡喜と希望とを以て、今更の如く、雲に聳ゆる高千穂の高嶺嵐の其の昔を仰ぎ見た目出度い紀元節の夕であつた。

本郷は三組町なる樋口勘治郎氏の宅で、曾根金川氏等の主唱に成つた教育茶話會の初會が開かれた。

來會者の顔觸れをいろは順によつて列べて見ると左の通りであつた。

東京府立第一高等女學校教諭	市 川 源 三 君
哲學館大學講師	立 柄 教 俊 君
東京高等師範學校教授	棚 橋 源 太 郎 君
	曾 根 金 川 君

文學士 矢野 太郎 君  
法 學 士 山 本 信 博 君  
東京高等師範學校訓導 松 田 茂 君  
陸軍歩兵少佐 寺 家 村 朔 北 君  
文 學 士 阿 部 莊 二 君  
文 學 士 佐 々 醒 雪 君  
東京高等師範學校教授 佐々木 吉三郎 君  
樋 口 勘 治 郎 君

何れも下へは置きさうにも見えぬ面々、それが、長方形のテーブルを取り圍んで、思ひ思ひの椅子を占め、紋切型の挨拶を述べ、浮世の甘味や辛味を評し合ひ、滑稽諧謔口を衝いて出で、私語きもすれば笑ひもし、而して、其の聲が巴形の波紋を作つて、壁間に掲げられた美人の額面に反響して居る有様を見ると、實に天真なもの、無邪氣なもの、意地の剛ひ議論や、人泣かせの皮肉な素破拔や、若しくは、天下を風靡せしめる程の大氣焰は、何處を押して出るものかと疑はれる程であつた。

やがて、時計が午後の六時を報じた頃、同會主唱者の金川君は、徐ろに立つて』本會を組織した所以は、教育に關して趣味を有して居らるゝ各種の方面の方々の會合を願ひ、互ひに教育上の諸問題に就いて、名の如く茶話を試みやうといふのが、主要なる目的であります。幸に、各位の熱心なる御賛成を得まして、而かも、此の建國の大紀念日に方つて、其の發會を見るに至つたことは、誠に満足なる次第であります。何卒此の會が、我が 皇室、並びに帝国の無窮なるが如く、何時までも榮え行かんことを希望して止まぬことであります。

御主人の樋口君には、位置が中央であるからとの故を以て、會場の御迷惑を願ひました段は、重々御禮を申し上げます。』と様の、開會の辭やら挨拶やらを簡単に述べ、亞いで、缺席者數氏の氏名を報告し、終つて、同會の規約を議した。

『法は三章、乃ち足る』といふのが、一般の輿論らしく、苦もなく纏まり了つた。けれども、『何んな會員を以つて組織し、何の位の大きさのものにするか』といふ問題は、種々の説が現はれて、議論に花が咲いた様子であつた。

規約の結果、本會に二名の幹事を置くことに成つて、樋口曾根の兩氏が、選に當つた。

此の時、晚餐は陳列された、盃は擧げられた、ナイフとフォークは盛に動かされた。『是れは、茶話會ではなくて、「酒食珈琲談話會」では無いか』と誰かの洒落も、時に取つての愛嬌であつた。

一座蕩然たる頃、樋口氏は立つて、同會の組織法に就いて、其の意見を述べた。曰はく、會の組織は肝要である、組織が拙かつたならば、何等の爲し得る所は無い。會員が利口な連中のみだから、利口な何事かを爲し得るであらうと考へるのは誤りである……』と、面白い比喻を取つて、説き去り説き來り、『兎に角、本會を究屈なものにしたくない』と、例の社會學の思想をほのめかした。

山本氏は、『私が金川君から通知をうけたのは、昨夜の十時過で、今回は別に談話の準備もなければ、次回に何か大氣焰を吐くことに致しませう。』と、靜に辭して、次に讓つた。

矢野氏は立つた。曰はく、『自分は、普通教育に於ける史學科に就いて、平素疑問を存して居る點があります。今夜は、幸ひ、斯道に定見ある方々の御會合でありますから、正しい解決を與へて頂きたいと思ひます。といふのは外でもなく、我國の正史に傳へられて居る歴史上の事實でも、一定の見解の下に、其の立ち場の危いものが随分澤山ある様に思はれる。例へば、兒島高德とか、櫻井驛とか、辨慶とか、一時世の中を騒がせた問題の外に、彼の壬申の亂の如き、若しくは、天武天皇、天智天皇の御事蹟の如き、随分、穿鑿をすれば、色々の説が出て来る。而かもその説には、有力なものもある。苟くも、教育に於て、誤を傳へることが不可であるとすれば、疑はしきは缺くといふ流儀で、それ等には手を觸るべからずとして置くか、或ひは、進んで抹殺するか、退いて保守するか、何れが最も當を得た遣り方であるかといふのであります……』。

聲に應じて、棚橋氏は起立した。『此の紀念すべき日に於て、此の『メモリアル、トピック』を研究することは、餘程意味があつて面白いことと思ふ。それ故、今夜は、歴史教授上の諸問題を、予等の話題に採りたいと思ひます。……』といふ前序の下に、『自分は、幼時觀劇を好んだ、それが爲め、歴史といふものに就ては、大に趣味を持つ様になつたと思ひます。……演劇は、實に、歴史の直觀教授であつて、チヨン鬻もこれによつて知られ、社杯もこれによつて解せられ、其の他、あらゆる具體的武士道は、これによつて小供に傳へられ得ることが多い。現今は、各種の方面からして、演劇の改良といふことを唱道する様になつたが、私は、それにかぶれたといふのではなけれど、普通教育の側からして、大に演劇の改良を要求したいと思ふ。兒童に適する様に、時代物の脚本を仕組んで、子供に適する様にそれを舞臺に上せ、各種の設備を教育的にして演じて呉れる者があるならば、單に、歴史教授上の好伴侶たるのではなく、教訓の上からも、趣味の養成の上からも、其の他、あらゆる教育上執るべき事々物々の上からも、極めて實效の多いことであらうと思ふ。若しも、此の事にして實現せられたならば、私共は、學校の休日等を利用して、觀劇同盟會を組織して、盛に押しかけて小供と共に見物しやうと思ふのであります。……』。

これから、逐次、席の順序によつて、十分間宛の談話は試みられた、此の間、松田氏の兒童訓練上の所感、曾根氏の出征教育家の消息談、立柄氏の歴史教授に關して、矢野氏の提出問題に對する意見等があつたけれども、急用で立席して、聴き漏らしたのは遺憾であつた。

余が席に復した時、佐々木氏は、『……立柄君の溫健な説に賛成を表す。……』『不確實な事實を小供に傳へるは固より不可である。けれども、歴史は多くは後世からの想像を記録したもので、那珂博士が文といふ雜誌上に、日本の紀元について論ぜられたことがある。八釜しく論じた日には、恰も今日、お互ひに祝つて居る紀元節さへ無意味なものになるかも知れぬ。それ故、要するに程度問題であつて、假令見て來た様な噂を眞實と話して居ることがあるかも知れぬけれども、世間一般にそれを信じて居る間は、矢張り事實として保存して置くより外はない……』『棚橋君の演劇改良論には、全然賛成の意を表するものである。實に小供の趣味は歴史にあるもの……直觀教授の爲め、又兒童彼れ等自身の爲め、歴史を其の儘演劇に試みたならば、何んなに教育界

を利するであらうと思ひます。』

阿部氏は、曰ふ『……自分は越後の生れである、『越後の人間は肋骨が一本足らぬ』とは、昔からの言ひ傳へであるが、詮じ詰めたならば、馬鹿であるといふことであらう。所が、此の馬鹿であることは、教育家としては、實に必要な一要件であると思ふ。私は嘗て中學校の一年級の児童を教へて見て、浸み々々馬鹿の必要を悟つた。『先生といはるゝ程の馬鹿でなし』とは千古の明言、よく穿ち得たものであると思ふ。馬鹿で不得要領な教師は眞の教師である……』。

市川氏曰く『阿部君の説に全然同意を表する……。訓練に就いて松田君の説もあつたが、自分は斯う云ふ。自分の苗字に惚れたといふ譯ではなけれど、人は總ての方面に於て、市川團十郎の役を勤めたい、即ち、自分を流行の中心としたい。流行といふ潮流程恐ろしい勢力を持つて居るものは無い。自分が女子を訓練する上に、總べての方法總べての計畫は多くは徒勞であると感じた。彼れ等はよく男子の缺點を知り、男子の不得要領を笑つて居る。けれども、彼れ等に向つて、最も勢力のある遣り方は、流行の二字を後援として進むことである、『それは流行らぬから止せ』『斯くすることは最新流行の方法である』といふ風に行くならば思ふ通りに行はれぬことは無い。是れが女子を矯正する極秘である。……本會にしても、其の通りに、遣りたい。即ち、本會をして、教育界の團十郎、流行の中心、ハイカラー界の巴里としたいものである……』。

佐々氏曰く、『教育とは、個人の力が何物かを感化することであると思ふ。それ故、教育家其者の全體即ち人間としての價値が俱はつてさへ居れば、教育といふ者は計畫なくとも行はれる。元來、人間が人間を教育するのであつて、教授法や訓練法が人を教育するものでは無いから、此の見地からいふならば、教授法とか訓練とかいふものは、教育界には無くても宜しい。是れが、私の宿論であつた。所が、嘗て中學校の先生が生徒を教授して居る實況を目撃して、始めて知つた、成る程教育界には、教授法とか訓練法とかいふものが需要である、彼等の如きお粗末な人物が教育を主どつて居るとすれば、一日も教授法なかるべからず、訓練法なかるべからずであると思ふた。それと同時に、何だか知らぬが心細くも感じた。……』。

寺家村氏は『私は、……』と述べ出したれど、余は不幸にして又離席した。

余が席に復した時、樋口氏の氣焰熾なるの時であつた。『……總べての物を完全にあらしめやうとするのは、實に、人間の淺知恵である。總てのものを平均して、團體の完全を期したならば、個人々々は『アミーバー』の如くに特色の無いものとなり了るのみである。松田君の訓練方法は、よく當を得たものである。歴史教授でも其の通りで、苟も疑はしきは省き、考證の據るべき無きは嘘と相場を定めて了へば、歴史は寧ろ無い方がよい。是れは、佐々木君の説の通りである。社會一般が是認して居る時代には、否認は無益である。それを否認せしめる迄には猶多くの時日を要する。時機が來れば、輿論が定まる。輿論が定まつて後、それを傳ふれば教育家の任務は終るのである。元來、教育といふものは、當時の時代觀念を其の儘未來に引き繼げばよいのである。佐々君の説に就ても其の通り、教授法訓練法が世の中に存在する間は、教授法訓練法は其の必要を世の中に認められて居るのである。教育家が眞に理想通りの教育家のみで填められた日は、佐々君なくとも教授法や訓練法は世の中から消滅して仕舞ふ時である……』

佐々氏は、更に立て、『教育は、現在の人が如何なる考へを以て總べての物を見て居たかといふことを後世に傳へるのであるといふ樋口君の説には、全然同意を表する。歴史にしても其の通りで、畢竟、歴史は、現在が如何に過去を見て居るかといふ記録に過ぎないものであるから、教育上八釜しい穿議は固より不要であらうと思ふ。元來教育は眞理を教ふるものであると思ふのが既に飛んだ謬見である。文部省などの仕事が何時も此の謬見から失策を醸して居る。文部省は現社會を後世に傳へることの便宜を圖つて居れば其のお役目は濟むのであつて、自分が眞理の中府であるかの如くに、國語調査會を轄下に置いて見たり、文字を増すとか減らすとか、假名遣を何うすとか、勝手に自分が先覺者の積りになつて騒ぐのが極めて宜しくない。』と、段々文部攻撃の方に砲火が向いて來た。最後に至つて、『行政府は意思の機關なり』と絶叫する。『否、日本の政府は然らず』など、反對の聲も起る。

それより、談話は、又入り亂れて、一齊射撃となり、十字射撃となり、突貫する、砲撃する、甲論乙駁丙賛丁難。十一時を過ぎて、散じた。

(是れは、是れ、給仕のひまゝ、聴きかすりの片々を書き留めたもの、議論に矛盾のもの、語句に不穩のものがあつたらば、そは、筆者の罪)

『教育界』第四卷第六號

教育茶話會記事 (第二回)

石川松溪

余は金川君が本會の發企を思ひ立たれし時より熱心の賛成者であつたが、第一回には病氣の爲め不幸缺席して會員諸君の風姿に接するを得ななだ、然るに今回は幹事兩君より本會の景況を記すべく命令を受けたれど、さて余の如きものゝよく其の任を盡し得べきであらうか、甚だ覺束ないことである、殊に錚々たる東洋教育のオーソリチーとも云はる可き諸名家が集つて、或は學術上に渡り、或は實際上に説き及ぼす、趣味あり裨益ある談話會の状態を、余の如きものが遺憾なく寫して讀者に紹介せんとするは、所謂螳螂が立車に向つた如きものである。剩へ前回には給仕某君が頗る輕妙の筆を以て書き立てたので、其の後を襲ぐ余は、幾度か筆を捨て躊躇せざるを得ななだ。かく深く自ら其の任に適せざるを恐るゝけれど、又一面に於て余は本會に對する燃るが如き熱情おさへ難く、遂に筆をとることゝ決心をした、されば其の文の拙ないことゝ、諸君の演説の立論と趣味とを寫實し得ない點は、豫めお許しを願つて置く。

第二回教育茶話會は、豫報の如く三月十一日、本郷區駒込動阪町百一番地矢野太郎氏方に開かれた。

恰も好し此の日沙河方面の皇軍大捷を博し、奉天既に我が有に歸し、殊に右翼に奮進したる乃

木軍は、新民廳より驀らに敵の背面二臺子に詰寄せ、今や黒鳩を生擒して凱歌を奏するならむとの報、頻々と傳へられたることゝて、奉天占領の祝捷會を兼ね開く可しとの意氣込にて、定刻前より眞先きに出席したる曾根幹事を始めとし、我れ後れじと駈集つたる面々十有三名であつた。其の姓名を會主の君から到着順によりて列記すれば、左の通りであつた。

文學士	矢野太郎君
	曾根金川君
『少年界』主筆	福田琴月君
文學士	山本信博君
東京高等師範學校訓導	松田茂君
文學士	阿部莊二君
文學士	常盤大定君
	牧口常三郎君
	石川半山君
東京府第一高等女學校教諭	市川源三君
東京高等師範學校教授	棚橋源太郎君
	樋口勘治郎君

廳て設けの食堂に誘はれ、晚餐の席についた。忽ちにして滑稽諧謔、忽ちにして高論卓説、感興湧くが如き中に、矢野氏は起つて盃を挙げ、『諸君奉天占順を祝さうではりあませんか』待ち構へたる會集、機を得て一同總立となつて萬歳を祝した。

此の時福引の餘興が催ふされた。幹事が『樺太』と呼ぶと阿部君は私ですといつて『割箸一本』をうけ取つた、『何れ日本(二本)のものとなる』といふ落であつた。半山君は『旅順の要塞』といふので『はがき』一枚、これは『開狀(城)』といふ譯だとさ。棚橋君には『失禮ですが奥さんですか』といふので、焼芋十個、イ、エ妹(芋十)ですといふ説明。君子の常盤君に『酒癖の悪い人』といふのが當つたので、何かと見れば『巻煙草』であつた『飲んではく』といふ解釋。夫から樋口君に『君の細君は』といふのが當つて『餅三個』、これは『三餅(身持)』。何れも願を解かすやうなもの計りで、暫らくは洪笑の聲が絶へなかつた。

愈々例の如く十分間の順番演説が始まつた。

樋口氏が先づ立つた。氏は輓近教育界の問題となりし『埼玉縣師範學校の騒動』と題して曰く、『彼の學校騒動を見るに、學校そのものは異例の現象を呈したのだから病氣に罹つて居るといつてよいが、生徒等個々は普通の行動をとつたので病氣に罹つて居るとも思へぬ。若し一人二人の獨立獨行者があつたならば、其等の少數者こそ、健康状態でないといつてよからう。(僕は健態と病態との區別を普通であるとなつてよとする。僕の新教育學に「學校に罪人のあるは惡兆にあらず」といつたは之が爲である) 全生徒の普通良心が不幸にして同校校長職員等の普通良心と一致せずして、遂に這般の大騒動を惹起したのである。校長はじめ職員等の有つて居る普通精神と、生徒等の有つて居る社會精神との衝突である。夫故に之を矯正するには、雙方又は一方の

社會精神を改め、各の善とする所を一致せしむるを要するので、ドウしても社會的の治療をせねばならぬ。然るに同學校の處置を見れば、生徒一人々に説諭をしたり、一級つゝ復校せしめたりして、姑息の策をとつた様だが、是では一時は鎮靜しても、他日再發する虞れがある、余が社會的大治療といふ意味は、十分間では説きつくせぬが、賢明なる諸君は既に了解せられたことと思ふ。』

次に棚橋氏は、樋口氏提出の問題について説を述べた。曰く、余は此の問題を制度の罪と論定するに躊躇しない、抑も現今の師範學校寄宿舎なるものは其規則の厲行に伴うて起る結果に就ても、甚だ遺憾の點が鮮くない、畢竟是は制度の罪である、先づ眼を今の師範學校舎監と教員の境遇とに注いで見よ、教員等は早く月給の多き……待遇のよき學校に轉ぜんことを希ひ、全く其の學校は一時の腰掛である、墳墓の地……第二の故郷どころぢやない、教員の轉免頻々として、應接に暇あらずと云ふ状態である。教員の交迭が激しい故に、一の寄宿舎に二百三百の生徒を置いては、實際眼が届かない、夫れ故に生徒の善悪は舎監によく分つて居らぬ、止むことを得ぬから、舎監は取締を嚴にする、此の結果と云ふものは、生徒の側から舎監を見ると、全然巡査交番所であるかの感がある。夫れで教員は何事も只『事勿れ』主義で、偷安姑息に其の學校を治めて行けば、夫れが當局者のお覺え目出度のである。眞に其の教育に熱中して、根本的に學校の風儀を革めやうとか、自分のよからうと思ふ主義を行つて居るやうな、實際の仕事と云ふものは、視學官も見て呉れぬ。斯かることは皆な制度の不完全より來る結果と思はれるから、(一) 學校教員は終世教員として昇進榮達の途を開くか (二) 英國風の寄宿舎にして一舎二三十人づゝに分けるか (三) 視學制度を發達せしめて事實上に教育の眞價を鑑別するか、等にして此の弊害を矯るより他に途はあるまいと思ふ。

牧口氏も學校騒動について意見を述べた。曰く、『余は今日の師範學校寄宿舎制度を絶望のものとも思はぬ、世間往々師範學校は寄宿舎制度の嚴重な爲に、よい人間を得られないと云ふが、若し果して此の説の如くならば、軍隊に於てはよい人間は出來ない道理であるが、我が國今日の實際はサウでもなさうである。余の考では、數多い生徒の中にはドウしても矯正の出來ない悪い生徒がある、是等の悪生徒をも尚ほ惜んで淘汰し得ぬ爲に、何時も此の悪生徒が原動力となつて種々のことをする。集會の發起人になつて學校騒動を起すやうなこともする。夫故に余は學校騒動の根本を治療して行くには、斯かる悪生徒を今少し思ひ切つて淘汰をして、サウして寄宿舎の規則を行つていつたならば、騒動は出來まいと思ふ。』

福田氏は、風變りの『お伽噺と時代』と題して演説した。曰く、『日本從來のお伽噺も、時代と伴つて居るものである、云ひかへれば皆な其の時代々々の精神を現はして居るが、併し此のお伽噺と雖も、時代と共に變遷の必要があると考へる、今の時代に於て最もよく適合したるものは何であるかと云へば、余はカチゝゝ山を推薦する、此の噺は一疋の兎が義俠心からして老婆の仇を報ゆるのであるが、これも決して利己心ではなく、丁度日本が義俠的に露西亞と戦ふのと、眞によく適合<sup>はま</sup>つて居ると思ふ、故に余は四月三日に青年會館に催す少年少女の談話會の餘興にも此のカチゝゝ山を選んだ……。』

矢野氏は、『余をして文部大臣たらしめば』といふ題下に、『中學校に於ける英語科を三年以下斷然廢止し、四年五年は支那語と共に随意科として課することにする』『其の理由は、現今の中學校生徒が、十中の七分方腦力を費すものは英語と數學とである、斯くの如く腦力を費やし、時間を要するにも係はらず、卒業生の實力を見ると、眞にドウも情けない状態である、斯程迄生徒を苦しめて、しかも殆んど效力のない學科はこれを存置する必要はないと考へる。又現今の中學校生徒は、讀書力と作文力とが、非常に拙劣である、十年前の中學校卒業に比すると、懸隔が甚しい、其の原因は何であらうか、矢張り此の英語と數學とに非常の時間と腦力とを費やす結果ではあるまいかと思はれる、兎も角、前述の如く一二三年は斷然英語科を廢し、四年五年へ支那語と共に随意科として課することにして、以て讀書力、作文力を養成する時間を、今少しタツプリ與へたいと思ふのである』と説いた。(《確か棚橋氏の聲だつたと記憶して居るが、「外務省と衝突せぬやうに……」と云ふ注意があつた》)。

曾根氏は、『演劇を見て感あり』との冒頭を置き、『余は先日新富座に一日の觀劇を試みた所、同座興行の演劇は『信州川中島』であつた、……これは勿論何かの作り換へであらうとは思ふが、兎に角、上杉謙信が武田信玄の臣山本勘介を味方にして、越後の軍師と仰ぎたいと云ふ所から、遂に謀計を以て勘介の妻と母のこしちとを謙信の館に連れ込み、此所で謙信が給仕となつて勘介の母に立派な膳を勧める、然るに勘介の母は、今我が子は信玄の臣であるのに、其の母が敵の大將から馳走になつては、勘介の刃が鈍ると云ふて、其の膳を蹴散す所など、これを兒童に見せると、眞によき教訓で、古名將が如何に人材を吸収するに勉めたものであるかといふことを理解せしむることも出来れば、又こしちの行爲杯は立派な女子教育の爲めになると感じた。それで棚橋君杯に一日も早く『兒童觀劇同盟會』を起して貰ひ度いと思ふところが、幕がかはつて『籠釣瓶』となつた、此の場は治郎左衛門といふ男の放蕩の状態を演ずるので、前の幕に、早く兒童に演劇を見せ度い思ふた余は、正反對に演劇は兒童に見せてはならないと感じた。詰り余は、教育家は一日も速に俳優と握手して、演劇の撰擇改良をして、尠くとも非教育的のものを演じさせないやうに努めねばなるまいと思ふた。』

阿部氏は曰く、『矢野君の中學校英語廢止案に就ては、余も意見がある、先日予は此の三月に卒業して出る所の中學校生徒に向つて話したことがある。日本でも是からは、中學校の教科目から英語を取去つて仕舞ふやうの世の中にせねばならぬ、と斯う云ふたが、現今のやり方では、中學校で五年も英語をやり、又高等學校を出て、大學を卒業しても、ドウも西洋人と會話の出來ぬものが多い、是は畢竟教授法がプラクチカル的に傾いて居つて、學理を専門に極めるからであると思ふ、尤も何も大學校を出て通辯をしようと思ふ譯でないから、是でも善いことはよいが、ドウか將來は日本が外國の思想を取入れる必要のない迄に、總ての學問が進歩して行くことを希望する。斯う云ふ時機に到着したならば、中學校の英語は廢しても決して不都合はあるまいと思ふ。……』

次に石川(半山)氏は立つた。例の流暢の辯で、倫理問題に就て滔々と説き始めたが、余は不幸にして此時離席した爲に、氏の演説を聞洩した。

松田氏曰く、『余は元來男女共同教育の主唱者であるが、此の兒童教育に就いて、男性と女性と一緒にして教育して行くことは、頗る有益なことであると考え。若し余に三萬圓の金を托して呉れる人があるならば、余は畢世の事業として、幼稚園時代からして男生と女生とを一緒にして教育を施し、高等小學校卒業時代まで、自分の理想通りに教育して見たい。男女ともに一長一短あれば、各々其の長を採り短を補つてゆけば、夫々立派な性行が出来上るだらうと信ずる。余が多年實驗する所によると、男女を餘り嚴重に隔離せしめて置くと、其の間に於て男は女を珍らしいものと思つて慕ひ、女も亦男を慕ふやうになつて、非常な弊害が出来る、何でも男女兩性は、互に相知り相接して、珍らしい、慕はしいと云ふやうな念を去らせるやうに教養せねばならぬ。餘り嚴格に兩性を區別するは、其の利害得失に就て餘程考へものである。』

常磐氏は、『我が國學生の氣風が非常に變遷して來て、現今の氣風と明治初年頃との氣風は、此の間に餘程の差異が現はれて來たやうに思ふ。一時は學生の氣風に、投機的の思想を有つて居つたこともある。例へば或る中學校に居つた三年生の生徒は、他の中學校へ四年生で轉ずる、又其の學校を止めて他の學校へ五年生で轉ずると云ふやうな状態であつた。此の思想のよつて來つたのは、明治維新の際に當つて、地位もなき一平民が高位高官に昇つたと云ふやうな實例を見て、後進のものが非常に投機的に傾いて來たものであらうと思ふ。然るに三十四年星亨氏の殺害頃よりして、學生の氣風は一變して、秩序的に勉強せねばならぬと云ふことを悟つたやうである。凡そ人といふものには、成程活動は必要であるけれど、又一方には其の身の修養、消極的にドッシリとした修養が必要で、佛語に所謂煩惱なるものを抑へてゆくことが大切と考へる。自分は、三年鳴かず飛ばず、といふ言葉は、餘程旨の深い言であると思つてをるが、要するに消極的に修養をして、而して世に出づ可きものであると云ふ考へが、教育上大に必要であらうと思ふ。』

市川氏は、『凡そ人は、身體と心と一致して居るものである。故に此の身體の疾病、精神の疾病、何れの疾病に罹つて居るものも、其の治療をして行かうと云ふには、兩方一緒に治療して行かねばならぬ、個々別々に治療して行くことは到底出来るものでない、例へば爰に精神の疾病に罹り、放蕩で困るものがあるとした所が、之を治療するには、矢張身體と精神と一緒に治療せねばならぬ、斯う云ふものに向つて、只消極的に異見して見ても、ドウも効力が乏しいやうに思ふ。夫れで此の精神と身體と一緒に治療すると云ふは、所謂催眠術の如きものが好き例證であつて、或る程度の病氣までは、是れに依つて治ることが出来る、故に將來は教育の方面に於ても、單に精神上の治療のみではいけない。此の點から教育者は醫師と握手するに至らんことを希望する。……』

山本氏は、『余は今の教育に移民の獎勵を必要と認め、是れが鼓吹を努めて居るが、元來日本人は愛國心と云ふよりも寧ろ愛郷土心が強い爲に、何れの方面に向つても、ドウも移民と云ふことに成功しない、斯う云ふ傾きが今日迄見えるけれども、新に強國の露西亞に勝ち得たる世界的の日本は、此の年々に増殖する所の人口を、何れにか移殖すると云ふ必要のあることは云ふ迄もない、夫故に余は教育の方面より移民の必要を鼓吹して、漸次國民をして移民事業、并に移民といふことに思想を有たせたいと思ふ。』と論じて、彼の佛國が愛郷土心の爲に、常に殖民政策に

失敗せる實例を引いて、移民奨励の急務を説いた。

次に余も『貧富の懸隔と普通教育』と題して、二三言を費したけれど、こは記すべきの價値はない。

かくて席を改め、自由談話に移つた。松田氏の『男女共學論』が暫らく話題に上つてゐて、大分談話に花が咲いたやうであつた。さて幹事の金川君から、次回の話題を定めて置てはどうであらうとの相談に、一同々意して、福田君の出題にかゝる

『兒童と演劇』

といふを次回の問題と定めた。

尚ほ新たに加入したる會員の氏名報告杯ありて、一同十二分の歡を盡し、午後十一時過る頃、會を閉ぢた。

『教育界』第四卷第七號

### 教育茶話會記事（第三回）

石川松溪

（話題『兒童と演劇』）

墨田堤や東叡山の櫻花も即ち唇を解いて今や將に満開に近づき、春風駘蕩たる四月十一日の午後五時、教育茶話會の第三回は、神田淡路町のたから亭に開かれた。此の日會するもの十四名。

文學士	常磐大定君
文學士	小谷栗村君
東京高等師範學校教授	棚橋源太郎君
『東京朝日新聞』記者	武田仰天子君
	會根金川君
東京高等師範學校訓導	松田茂君
『少年界』主筆	福田琴月君
『英文日露戰爭記』記者	藤本猪武君
文學士	阿部莊二君
文學士	佐々醒雪君
東京高等師範學校生徒監	櫻井寅之助君
陸軍歩兵少佐	寺家村和介君
	森次太郎君

はやくも階上の一室を占領して、波羅的艦隊東航の嘶もあれば、教育上の時事談も出る、殊に

三年間エール大學に在學されて、過般歸朝された森君のいろゝの洋行譚があつて、席は大層賑かであつた、やがて陳列された晚餐に、暫くはホークとナイフとの響き、また折々はカップの音が聞えるばかりであつたが、幾くもなく會衆の歡聲は亦再びもとに戻つて、隣席を驚かすやうな笑ひ聲が聞ゆるやうになつた。

やがて、幹事の金川氏が開會の挨拶を述べると、寺家村氏は、莞爾として起立し『前回缺席した代りに今回は少しく長く話ませう』と、先づ愛嬌を醸して。

『軍事教育と普通教育との關係』

と題する趣味ある一場の演説を試みられた(本誌別項論説欄参照)。夫から前回に定め置きたる話題に就いて、例の如く十分間演説が開かれた。こゝに其の概略を述べて見やう。

話題 『兒童と演劇』

福田琴月氏

私が此所で諸君よりお先きに起つて演説をしますのは、甚だ嗚呼がましい次第であります、私は出題者でございますから、失禮ながら一言申述べたいと思ひます。此の兒童と演劇と云ふ題は、少しく漠然たる題であります、大別して之れを二ツに分けますると、第一在來の劇、即ち今日までの日本の芝居と云ふものは、兒童に見せてよいものであらうか、見せない方がよいかと云ふことゝ、第二は兒童に見せるには如何なる演劇が、最も適してゐるかといふことの二ツになります。夫れで私は日本在來の芝居と云ふものは、絶體的に兒童に見せて悪いと云ふのであります。

まづ兒童の方はさておき、わが國民の多數が、日本在來の劇を見て盡くよく理解つたか、理解らないかと云ふのは、疑問であります、彼の有名なる『忠臣藏』『鏡山』『妹脊山』の如き劇であつても大體の筋は分かりませうが、言語動作の凡てが國民の多くには理解らないで見て居つたものであらうと思ひます。又脚本の作者の側から云つても、場面の變化だとか、かたなどに重きをおきすぎて其の趣向の首尾一貫しないものが随分多い。が、此の様な脚本が多く歡迎され、繼續されたのは其の作者以上の、モット大きな立派な俳優が出て、其の俳優の力を以て、脚本の價値以上に演ぜられて居つたもので、此状態と云ふものは、維新の大騒動に依つて多く革進され、變化されるべきものだつたが、丁度此の時に日本の前後にない所の大名優が三四名現はれて、其の神來の妙伎を以て、脚本のあらを補つた爲めに、此の脚本を率ゐられて居つた爲に、一昨年まで續いて居つたのです。實際坪内先生の所謂夢幻劇が、名優のお蔭で、仕活されておつたのです。かの、舊劇界最後の二明星も死んで仕舞つて、最早や舊劇は倒れて仕舞つて是れからは、新なる脚本家が、靈妙の筆を以て、國劇を創造するの時であります。まづ其前に此頃は一般に、小説を芝居に直してかの『乳兄弟』とか『不如歸』の如きものが、劇に登ることゝなつたが、これは在來の劇よりすると、幾分か見物人が想像し得られるものだから、大人には分るか知らないが、之れを兒童に見せてドウであらうかと云ふことを、一言で斷ずることの出来ないことが理解ませうと思ひます。

こゝに在來の劇について、一寸例を引いて見ますれば、此の前回に曾根君のお話のあつた『輝

『虎配膳』のお話につきましても、私は斯う云ふ風に考へて居る。元來彼の劇は、上杉輝虎には直江山城守と云ふ家來があつて、武田信玄の家來に山本勘介と云ふがある、其の直江と山本とは兄弟になつて居る所から、勘介のお母さん越路と云ふものを、直江の計略で上杉の館へ招き、此の越路を優遇して勘介を上杉の方に仕へさせたいと云ふので、輝虎が配膳をして越路に食はず、所で越路が此の輝虎の饗應に與つては、勘介の刃が鈍ると云ふので、足で蹴かへす、蹴かへすと同時に、引ぬきと云ふので上杉がガラリー衣裳が變つて『天子將軍にも配膳いたさぬ此の輝虎』と大見得で大層腹を立て、越路を斬らうとする、此所で、不自然なことです。が琴があつて、勘介の女房が琴を以て輝虎を遮ると云ふ所であるが、此の劇の原作は、かの劉備<sup>もと</sup>玄徳の軍師の豫庶が魏の曹操の謀によつてお母さんの擬似手紙を見て魏の國へ行く、處で母に逢つて聞くと、全く操曹<sup>(ママ)</sup>の謀計であつた。母は怒つて硯を投つけたと云ふ話がある、夫れを書きかへたものであるとのことだが、此の芝居を兒童に見せることは大に考へものである、此の劇は英雄の心事を現はしたものであるとか、壯烈であるとか云うて見た所で、此の劇の如きは無作法なる、不自然なることが夥しい。人の配膳を土足にかけるとはよしやそれが敵であらうが味方であらうが無禮無作法の極といはねばならぬ。文明の戦をしてゐる今日こんな前世紀の無作法なる劇を兒童に見せては害があつて益のないことと思ふ。デありますから在來の劇を兒童に見せると云ふことは私は不賛成である。扱そんならどういふ劇を小兒に見せたら能いといふことを承るのは、之が今日私が出題の本旨でありますから是から、諸君の高論に待つことといたします。

會 根 金 川 氏

只今福田君から余輩の前回に述べたことに就て御演説がありましたが、『信州川中島』を兒童に見するがよいか悪いかといへば、私は飽迄兒童に結構な芝居と思ふて居ます。併し、それは枝葉の問題に成りますから、別に話をしないと致しまして、今日は本問題に對する教育者の態度について一言して見たいと思ひます。

今日の演劇は、兒童に有害であるから、見せてはならぬと、申して見ても、それはいふべくして、行ふべからざることであらうと思ひます。それで教育者は、先づ從來日本に行はれて居る演劇の調査もし、研究もして、如何なるものが兒童に適するか、演劇に伴ふ利弊は如何、と云ふやうなことを、兒童并に家庭に忠告を促がす必要があらうと思ひます、即ち斯う云ふ劇は兒童に見せてはよくないとか、或は芝居見物には、可成家族が同伴して行くがよい、とかいふやうなことを、直接兒童にも話をするし、又家庭にも警告するといふことが必要であらうと思ひます。併しこれは教育者の消極的態度とでも申すべきものでありまして、これだけのことをすれば、それでよいと安閑としてをる譯には參りません。尚ほ一步進んで、積極的態度を以て、今日普通演劇以外に、更に兒童に見せる演劇を起すのが必要であらうと思ひます。私は、教育者中より或は進んで脚本の作家となり、或は俳優となるものゝ出でんことを希望する、私は、凡べての教育者に作家となれ俳優となれとはいはぬ、たゞ教育者中其方面に天才のあるものに向つて、此のことを望むのである、福田君などにも進んで劇場に立つて貰ひたいと思ひます、今迄は教育者が俳優になると、誰もそれを墮落したやうに思ふが、併し定まつた目的によつて俳優となる、詰り教育界



此所には文士の御集りでございますが、児童の爲に若しも、院本を御書きになる場合には、是非實際の歴史から取つた『牛若』とか『鎮西八郎』とか云ふやうなものを題目に御取りになることを希望致します、斯う云ふ類の院本の従前あつたものを少し直しても善からうと思ふ。只た困つた事は、其内に使ふ言葉の問題であります、是れは大に文學家諸君に御研究を願ひたい、従來の院本に使つてある昔の言葉はドウも分らん、是れはドウして宜いものであらうか、又演劇中に現はれる男女の關係であります、道學先生が今日の芝居を蛇蝎視して甚だ恐れるのも主として此の點であらうと思ふ、私共今迄芝居を見た所では、世間の實際で見聞した所よりは芝居の方の戀愛は概して高尚である様に思はれる、従來の様に男女離隔主義で教育されたものの婦人觀は、極めて不健全である、女子といふものを全く理解して居らぬ、自分と甚だしく異つて居るもの様に思つて居る、随つて常に一種の好奇心誤解から妄想から起つた好奇心を以て見て居るのである、これが大概間違<sup>(ママ)</sup>の原であります、斯ういふ不健全な婦人觀を持たして置くことは、寧ろ危険であるではないか。

要するに何れの點から見ても、史劇の適當なるものでさへあれば、私は子供に見せた方が利益が多いやうに考へるのであります。

佐々醒雪氏

今承はります所では、諸君は小供に芝居を見すると云ふことを、倫理教育とか、歴史教育とかいふ、學校教育の補助にするやうなお考へであるらしいが、夫れは頗る問題であらうと思ひます。學校に行つて教師に十分むづかしいことを教授しられて居る児童は、他の場所では成可く私は氣樂にしてやりたいと思ひます。あらゆる児童<sup>おもちや</sup>の手遊品が、教育的意味が餘り澤山含まれて居りますると、ドウも児童は嫌やがるものである、若し『勝々山』よりは『牛若』が児童の嗜好に適して居るなれば夫れでもよろしい、歴史劇であれば實に面白がるならば、夫れでもよろしい、つまり児童の面白がる筋の巧なものがよろしいと云ふ外、別に何等の理窟もなからうかと思ひます。だが児童が教育上歴史の話が好きであるからと云うて、必ず演劇にも歴史劇が好きであると云ふ斷定は出来ないだらうと思はれる。

道德堅固な人は、若し『小春治平』を事實通り書き現はしたならば、振かへつて見ないだらう、が近松の筆で出來上ると如何なる人も欣んで讀む、立派なものになるので、ドウ云ふ材料がよいかといふのは、寧ろ末のことではありますまいか。だから私は材料から見て、いかなる芝居が児童に適するかといふことは斷じ難いと思ひます。

私など實驗する所によると、児童も高小等學<sup>(ママ)</sup>へ行く様になると、どんな芝居を見ても非常に喜ぶものであるから、まづどんな芝居でも見せてよからう。教育の方から云つても、感美の精神を幾許かづゝ發達させねばなりませんから、児童に芝居を見せると云ふことは、私は極く結構であらうと思ひます。少しばかり野卑な所があるとか、ないとかいつてサウドウも心配すべきことがあらうとは私は信じませぬ。だから児童と演劇の間には格別著しい關係はないであらうと私は思ひます。成程『忠臣藏』とか、『妹脊山』とか云ふのは児童には或は能く分りますまいけれども、是等は文學として亦劇として随分結構なものであるから、僅かに其の一部丈わかつても既に一の

修養にはなる。

又『勝々山』とか『猿蟹合戦』とか云ふものは、餘り文學としての價値がありませぬもので、所謂お伽芝居と劇とは譬へて見れば眞正の喇叭に對する手遊品の喇叭と云ふやうなもので、劇とは性質が違って居りますから、お伽芝居は劇以外の兒童むきの一種の見せものであると、私は思ひます。

要するにお伽芝居は劇でないから別問題、よき劇なれば何を見せても差支えないといふことに、私の考えは歸着します。

小 谷 栗 村 氏

諸君が段々芝居の局部のことに就てお話がございましたから、私は全體に涉つて、お話をしたいと考へます。

女の芝居に於けるは猫の鯉節に於けるが如くであります、夫れ故に女の芝居を好くことは申す迄もない、が、果して子供は芝居が好きであるか否や、又其の芝居が子供の爲になるか否やと云ふ問題は、少しく研究を要すること、思ひます。全體子供と云ふものはお話が大好きなもので、面白いお話をしてやれば、眠い眼をこすりながらも喜んで其のお話を聞くと云ふ位なものである、然るに芝居の多くは、此のお話を實際に現はしたものである以上は、子供は芝居が嫌いであると云ふ理由がない、又芝居と云ふものは、大體勸善懲惡が元になつて出来て居りますが、此の勸善懲惡が兒童の爲にならないと云ふ理窟もない。斯う簡単に申しますと、芝居は兒童に見せてよいと云ふことになりましたが、併し是れにはいろゝ事情がありまして、サウ容易に認可を與へる譯には行かないのです。先づ芝居の種類に就いて云へば、芝居の中には随分残酷なものもある、子供が之を見て、直ちに泣き出すやうな残酷極まるものもある、或は悲哀の情に堪へないものもある。或は又タマラないほど色氣に富んで居るものもある、是等は大人と雖も、見て宜しいとは斷言の出来ないもので、況して心身の發育不十分なる子供に見せることは餘程考へものである。然らばドウ云ふ芝居を兒童に見せてよいかと云へば、私は第一、面白いと云ふこと、而かも快活であつて面白いと云ふことが必要であらうと思ふ、第二、徳性を涵養するものが望ましい、少なくとも不道德のものであつてはならない、第三、四疊半的の狂言でなくして、今後の少年には、世界的の狂言が多く見せたいと思ふのである。此の他尚ほ棚橋君の説の如く、芝居の言葉を子供に分る様にする必要があると思ふ。それから又芝居の種類に就いて、新舊何方がよいかと云へば、私は洋食もよいが日本食もよい、洋服も便利だが日本服も悪くないと云ふやうな譯で、新舊何方にも一長一短がありますから、兩方相並んで採用して宜しからうと考へるのです。

芝居其のものに就いての大體の考は斯うであります、芝居を見るに就いて弊害と云ふべきものを、此に併せて一言したいと思ひます。夫れは何かと云ふと、芝居を見物するに就いて、甚だしく奢侈に流れて居ると云ふことである、女などは最上等の美服を纏い、夜の目も寐ずにお化粧して出掛ける、男も亦髭を剃り、なるべく意氣な着物を着て、イヤにめかし込んで行くと云ふ有様である、即ち劇場に於ては、男女共に有らん限りの美力を發揮し、マルで劇場は贅澤と華奢との展覽會と云つて宜しい、斯かる風習は如何に無邪氣の子供にも決して善い影響を與ふる筈がな

い、是れが弊害の一つであります。第二の弊害は、役者が舞臺の上で色事を演ずるのみならず、役者と見物人、若くは見物人同士の間にも随分色事が實際に演ぜられ、此所で色々間違ひの種が生じて来る。ツマリ美力を競ふのも、其の動機は此に在るのではないかと思はれる。第三には芝居と云ふやつは時間が長いに加へて、一間四方位の狭い所に四五人も詰められて、窮屈な思ひをして坐つて見なければならぬ、先づ體のよい禁錮である、斯う云ふことも兒童の爲には特に注意せんければならぬこと、思ひます。

要するに芝居は子供に見せて悪いと云ふ譯ではない、併し子供に見せる爲には改良して貰ひたいことが少なくない、是等の改良が出来ない以上は、今日までの様な芝居は、頗る疑問ではあるまいかと考へます。

常 盤 大 定 氏

私は演劇に對しましては全然無資格である事を先づ御断はりして置きます、さて諸君のお話は特殊の問題から一般に渡つて来て居りますのを、又特殊の方にかへつて行きますけれど、自分の少年時代の記憶経験から、極く特別な……矢張り脚本の材料に關する事に就て一言したいと思ひます。私は東北の生れであります、東北は御承知の通り、源氏に非常に關係があるのでございしますから、私などの兒童の時は、九郎判官義經とか、蒲冠者範頼とか、木曾冠者義仲とか、鎮西八郎爲朝などが、最も頭の中に活動した人物であります、繪など書きましても、必ず武者繪ばかりを喜んで書いたものである、私は武士の家庭に育つたものでない、又別に武人にならうと云ふ考へもなかつたのであります、斯の如き勇武絶倫な人格を畫いたり夫れを見るのが非常に楽しいこととございました、大抵人間の性質は同様のものであつて、同一の年齢ごろには、同様の思想を有するものであらうから、何れの地の兒童も矢張り武勇を好むものであらうと思はれる。現時の兒童に向つて、お前は何になりたいかと聞けば、軍人になりたい、豪い大將になりたいといふ様に、非常な勇武絶倫の人格を希望するのは、先づ十中九分である、サウすると兒童の見ものなどは、斯う云ふ材料を撰擇した宜からうと思ひます。先刻棚橋君のお話によると、兒童の演劇には時代ものがよいと云はれたが、私も兒童に對しては時代ものが最も愉快を興へ、又最も爲になるだらうと思ひます。村芝居などを見た事がありますが、人情物特に婦人が泣く位譯がわからず、従て不愉快なものはなかつたのである。

今日の演劇は、平家物語から謡曲を通つて劇に登つたものであるから、在來の時代物には源平時代のものが甚だ多いので、悪いものといへば梶原が代表し、善いものは義經が代表する程であります、かゝる經歷を有する演劇であるから、美化されたる源平時代のことが従來の芝居の好い材料となつて居ります、然し遡つて源平以前又下つて源平以後より今日迄の歴史に於て、天才の手腕によりて千古の傑作を爲すべき面白い材料がなんぼあるか分らぬから、之れを劇場に於て活動させることゝしたならば、随分愉快のことゝ思ひます。開闢以來の大事件たる此日露開戦に於て、かくまでの成功を擧げて居るのは、大半歴史の賜物であることは、誰も等しく認めて居る所である、斯くの如く迄出来てある日本の歴史の精華をドウか失ないたくない、今後東西兩洋の文明が接觸する事多くなるに随て、在來の美風が次第に衰へ行くのは免れぬ所であらうから、或は

講談にあれ、或は演劇にあれ、是非此精華を發揮して、兒童の頭裡に印象さして置きたい、日本と云ふ國は、開國以來何か他國と異つた一段の精神がありますが、是は歌ふも勿論必要だが、尤も効果の多いのは、之を形の上に働かす事である、無理に之を注入するとは異り、それが最も兒童の楽しく感ずるものであるから、兒童の演劇には、忠勇義烈の時代物が最も宜しいと思ひます。

餘談に互りますが、坂本左狂といふ陸軍少佐に關して南條博士より聞いた所を一言したい、此少佐は奉天附近の戦争にて負傷の爲に、遂に奉天占領に遭遇せずして、千古の恨を吞みつゝ、後送せられて居る、先頃南條博士が天津に行つて出陣の軍人に對し、楠公の精神を演説した所が、演説後に至りて、一將校が突然として博士に面會して語るのに、貴方は楠正成の精神をよく吞込んでお出なさる、今日の演説は私の注文通りに出來て大に感に入つた、實は私は楠公の神靈を深く奉戴するもので、居常座作、造次顛沛にも楠公の精神を以て龜鑑として居る、自分の室は七生堂と云ふ名をつけて居つて、其の記文をば誰かに書いて貰ひたいのであるが、東京の三島先生へ御依頼申したいけれど、三島先生とは師弟の間柄であるから、若し禮を缺てはと思へば、手紙の文句からして六つヶしいから夫れも見合せて居る、又赤松連城師に頼まうかと思つて居つたが、今迄生憎面會の機を得んで居る、今日楠公のお話をして下すつた所を見ると、貴下は楠公の精神をよく吞込んで居らつしやる様だから、是非一ツ書いて貰ひたい、此の頼みは決して辭退しては行けないと云ふことで、南條先生も快諾せられた、といふ事である、此將校が乃ち坂本少佐で、博士と少佐とは此時初めて面識し、其後は書面によりて頗る親密の交情を結んで居らるゝ。

少佐は、櫻井驛にあつた枯れ松を苦心して手に入れて額縁がくぶちを作り、これを七生堂にかけて、客あれば必ず先づ之を指して、御承知であらうがを前置として、諄々として楠公の忠心を物語りするを、無上の樂みとして居るさうである、又堺の某氏の家の重寶として楠家の持佛を藏するを聞き、非常の熱心と希望とを以て之を譲り受けんとしたが、如何しても其希望を達する事が出來ず、心竊に無限の遺憾を感じて居た所、愈々出征の日彼人が來訪して、少佐の生平に對して遂に此佛像を割愛したさうで、少佐はいよゝゝ楠公の神靈の加祐ある事感激し、踴躍しつゝ出征したとの事である。少佐は彼地より楊柳の木を伐つて、之を伸ばして平たく盆に拵へて、其の中へ南條先生の詩をば何時何所で見つたのか、頗る見事に彫つけて送つて來て、其の時の手紙にはどうか此の盆は貴下の側に置いて、日常身を離さぬ様にして貰ひたいと切に望んで來て居る、其他の書面より想像するに、少佐は名和長年及び楠公訣別を畫いた胴衣を幾つか持つて居らるゝ様子で、彈丸の急處をはづれたのも、全く神靈の加護と仰いで居る、斯る性行の少佐であるから、其子女の名までも甚だ注意したもので、長女は君子（蒲生君平の君）と名付けたが夭折し、長男は彦九郎（高山彦九郎）、次男は士平（林子平）、三男は正男（正成公の正を取る）、次女はしげ子（正成公の成を取る）と名け、居常此精神によつて、薰陶せられて居るとの事、又少佐が常に口にする所は、予は茨城縣の農家に生れたものであるが、一農夫の子にして、少佐の身にまでも、御取立を蒙り、幾千人の上に位する身分となつた此の恩義は、報ずるに餘りあるとの一事である。

以上餘談にて大に時間を取りましたが、予は此話を聞いて、我軍の連戦連勝も偶然の事でないといふ事と、又斯る家庭より豚犬の兒は決して生ぜぬだらうと、深く感服した事であり、要す

るに本邦の歴史の精華が、少佐の精神を鍛成し、此精神が日常百般の事に活動して来て居るのである、歴史に連絡して長々餘談に這入つたが、予が話の主意は、此二千年來の貴重なる歴史中に於て、而も兒童の最も愉快に感ずる忠勇義烈等を舞臺に上すのは、今後の國民教育に取りて、慥に有效と信ずるのであります。

森 次 太 郎 氏

今日此處に来る時に電車賃三錢、外に一錢の通行税を取られたが、此所では會費壹圓を正面税として取られ、外に何か話さねばならぬと云ふ側面税を附加された、寺家村君の軍法上の言葉を借用すれば、正面と側面と兩方で攻撃されて居る譯ですが、止を得ぬゆゑ何か御話致しませう。

本問題も教育家の立場から云へば、いろゝ注文も御坐いましやうが、矢張り世上では現在のやうな芝居が盛んに行はれ、我々自身の頭の中にも不知不識の間に其の芝居で遣て居る様の事がシミ込で居ると思ひます。一ツ二ツ思ひ浮ぶ例を擧て見ますと、私共が西洋に居て飯を食ひに賭所に行つたと思ひ玉へ、西洋では食事時間が朝飯ならば七時から八時、午飯ならば十二時から一時と云ふ風に、チャント定まつて居る、夫で若し八時を五分でも遅くれて行くと主婦は『モー仕舞ました』と云つて平氣で居る、日本の下宿屋であつたらば少々遅れて歸つても『お茶がぬるくて御氣の氣ですが』と斷りを云ふて膳を出してくれるでしやうに、西洋では先方が時間を守ること斯く嚴確であるゆゑ、若し此方が時間通りに行たに先方が何かの事情で準備の出來て居らぬ時がある、假令三分か五分間でも準備の時間を遅らしたら先方の失策である、其の時に『貴下空腹なことはありませんか』と聞かれた場合があるとして、此方は當然の權利があるのであるゆゑ、空腹ならば空腹など云うて差支ないのであるが、其處が日本人じや、千松流に我慢して『ノー、ハーリー』（急がなくてもよいです）位の返事をする、又た西洋では能く初對面の挨拶に『How do you like this country?』と聞く風があるが日本流は阿波の鳴戸流で、お歳は幾つ、お國は何處と聞く風がある、芝居は畢竟世間から産出したものであるが、是れが又た世間を教へ世の上の人々の頭にシミ込で居るのである、氣を附て考へたら以上の如き例が極めて多からうと思ふ。

芝居には變な戀があるゆゑ見てはならぬと申さるゝ方もあれど、餘りハケ間敷く云ふたならば現在の世間は到底住むことの出來ぬ者になつて仕舞ふであらう、可笑しな例であるが一、二の例を御話せんに、茲に街上にて犬が番つて居るとする、西洋では巡査が見附たら直にピストルで打殺す事になつて居る、日本では其儘に棄て置て世人は怪しまぬ、唯だ女學生が見て居ると之を攻撃する計り位である、又た鶏を飼つて居るとする、大抵は一夫多妻である、時には牝鶏の逃げるのを牡鶏が逐掛て無理の行為を演ずることがあるは、誰も屢々見る事であらう、犬鳥の事とは云ひながらコンナ事を見るのはよい事ではない。以上は極端な例ではあるが、餘りハケ間敷く云ふと、犬も猫も鶏も飼へぬ事になつて來る、我々の側から云へば注文は澤山あるが、俳優の側から云へば今の教育家の云ふ様な事計り云うて居たら、世間は野暮なものになつて仕舞ふと云ふかも知れん。

又た舊劇に對する非難は多い様であり、僕も實は自然に新劇が盛んになり、時勢と共に推移するであらうとは思つて居るが、舊劇とて、悪いこと計りではなく、何も恐るゝには足らぬと思

ひます、中には随分武士道の粹を表現して居るのも多いやうに思はれる、新渡戸博士の英文で書かれた『武士道』と云ふ書物が一時大に流行して中學校などでは之を英語科の教科書にして居る向もあります、是は少々御調子な話であると思はれます、外國人が日本の『武士道』なるもの、何なるやを知るには、日本人の書たものが一番信用があり、同書に憑るの外ないでしやうが、日本の青年には『忠臣蔵』なり『佐倉宗五郎』なり見せるが武士的教育の捷徑かも知れん、而して若し悪い所があれば、其處だけ批評して聞かせればよいのである。

私が彼地に居りました間に、ゼファーソンと云ふ有名な俳優が来てアービングの『リップ、ワン、インクル』を演じた事があります、又た来た当日にゼファーソン氏はエール大學生を集めて『喜劇と悲劇』に就て演説をしたです。畢竟するに芝居も其國の社會的狀態の一の縮寫圖であつて、社會相當の演劇が行はれて居るので、社會が進めば演劇も進んだものを演ずる様になるのであらうと思ひす。

松 田 茂 氏

いろゝ、お話がございまして、最早私のお粗末な考へを御披露するやうな必要はありませんが、順番でありますから、一寸一口。

醫師の衛生談を聞きますと、何から何までなかゝ、八釜しいことで、日本の菓子には殆んど無害のものはないとか、上等のビスケットの牛乳の澤山這入つて居るものでも、時間を定めずに食べては胃を害するとか、牛乳も沸し方や品質の撰び方が不完全では、無益にして有害であるとか、その他、飲食の分量から時間、運動とか休息とか、睡眠とか、随分八釜しい注意がいる様子であります。専門家が考へると何事でも斯く極端に走る傾きはあるものですが、偕、さう云ふ風にしなれば人の健康は維持が出来ぬものでありませうか。若し出来ぬとすれば、人の身體は誠に厄介なものであります。けれどもそこはよくしたもので、お互ひの身體には抵抗力といふものがありますから、其の抵抗力さへ養つて置かば、或る度までは、打撃にも、變動にも、病毒にも、缺乏にも堪へることが出来る。それが出来れば、精神にも大なる自信力が起つて来て、少々のことには屈托しないやうになると思はれます。其の抵抗力を養ふのには、身體を種々の事變に遭遇せしめて、鍛鍊して行かねばならぬと思ひます。

身體もサウでありますから、心も矢張り其の通りでありませう、前回にも『コエヂュケーション』に就いて申しました通り、何でも危険だ危険だと謂つて避けるばかりするのは、實に消極的な遣り方で、修養鍛鍊といふ上からは、あまり褒めたことではない、其の様な遣り方で保護せられたものが若し一朝此の危険に遭遇した時には、抵抗力が無い爲めに直ぐに參つて仕舞ふのであります。それ故、眞に親切があるならば、子供などにも或る度までは危険のものにも觸れさせ、善くないものも見せて、健全な抵抗力を養つて行かなければならない。私は、此の見地から老婆主義的教育法を批難するものであります。兒童の觀劇なども、私は此の主義から決して危険呼ばりをしない積りであります。元來兒童は、芝居のみでなく、活動寫眞でも、相撲でも、何でも異つたものは皆な好くのが奇を好むといふ必然の要求に適つて居るのでありますから、異つたものは成たけ多く見せる方がよろしい。その間に知識を進めば、鍛鍊も出来るのであります……（後

略)。

櫻井寅之助氏

此の席のお方は今晚の問題に關係の近いことを専門にして御坐る方が多い様であります、私などはかゝる問題に向つて彼是れ申す資格のない上に、先刻此席で甫めて問題を承はつた様な次第であります、が併し何にも云はぬのでは引退がることが出来ないとのことでありますから、一言述べやうと思ひます。私はかつてエヂューケイションナル、バリュー、オフ、サイエンスと云ふことを考へたことがあります、今日のように理學の應用が百般の方面に顯著なる成績を表はすに方りましては、何も面倒に考へないで分りきつて居るかの様です、併し私はこれを利用厚生といふ方面からでなく、教師が教場で理學を教へたり、又た兒童が理化學的の事項を自ら考察したりするのが、教育上ドウ云ふ値打のあるものかといふ理窟を考へて見たいと思ふたのであります。ソコで教育といふことについては、今寺家村サンの言はれた様にも解せられましやうが又斯う云ふ風にも考へられる、それはどうかと申せば全體この世の中は、總べて活動の世の中で、一事一物瞬刻も變化せざるものなしであります、此所にある所の樹木、器物などは一見した所では何の變化もせぬ如くであるが、絶えず地球と共に宇宙を運動しつゝある、即ち所謂物理的の變化を成しつゝあるは勿論、化學的にも亦た絶えず變化して居るに相違ありませぬ、マー例へば人の頭の髪の毛の如きも其の通りであります、一寸と見た所では伸びないやうですが、矢張り何時の間にか長くなるといふた様な譯で、總ての事々物々活動變化して止まぬのがこの世の中の有様である。夫れで教育と云ふことは、人をして此の如く萬事萬物の活動する間に立ちて適當に行動することを知らしむるものと言うてよいと思ひます。だから廣く申せばあらゆる變化即ち教育者といふ解釋になるのであります、例の學校教育を罵倒して居るカーネギーなどは、此の後の意味の教育で鍊られた仁なのだと思ひます。然るに今申す變化を分けて見ると、人事上の變化と物質界の變化との二つになるのであります、其中でどちらが學校などで兒童を教育するに適するかと申すに、夫れは先づ以て後者であると思ひます、根本の値打ちは兎も角もと致しまして、消化しやすいから従つて滋養にもならうといふ考なのです、勿論斯く申せば拙、物質界の變化も複雑極りのないものである、けれども其の變化は巧妙な理化學上の機械の助を借りて餘程まで簡単にすることが出来る、例へば降る雨を見て、あれは一秒時間に約三十尺の速さで落ちるといふことは、勿か々々分らないがアトードの機械を用ふれば容易に夫れを測ることが出来る様な譯で、随つて兒童をして種々の變化につき原因結果の關係を認めしむることが出来る、サウして次きには斯う云ふ原因があれば斯う云ふ結果を生ずるとか或は又結果から原因を推量することを生徒に悟らしめることが出来る、従つて生徒は物事に當つて間違つた判斷をせぬ様になるさうなれば即ち前申す教育の幾分が行はれたと申してよいのであります。

所が人事上の變化は、サウ云ふ風に扱ふことが六ヶ敷い、全體人事上の變化といへば現在のことは日々我々が目撃もすれば新聞雜誌などでも傳へられるし、過去のことは即ち歴史で、書物となり口碑となり、其他種々の形で傳はつて居る、さうして學校でやります所の歴史は、古くあつた歴史などと云ふものは、大概えらい人、考の最も複雑な人のやつたことが重なるものでありま

すから、幼童には分からない、夢中教はつて居ることゝ思ひます。

其所で今晚の問題の『兒童と芝居』といふことでありますが私はこの芝居といふものが、兒童に見せる芝居が出来るとすれば、その芝居が人事上の變化の關係を簡單なものとする事猶ほ理化學上のアッパラスが自然界の變化に於けるが如くあつて欲しいと思ふのであります。兒童に見すべき演劇は、彼等を歡ばしむる感動(?)を主とすべしといふ御説もあつたやうですが、藝術といふ方からはさうでも御座りませう。併し不知不識の間に芝居を以て文雅の感情、武勇の氣象、雄大の精神を涵養なる様に注意のあるのが望ましく思はれます、或はまた實業思想、經濟思想を吹込む爲に鹽原太助(外に適當の例がありまじやうが)の様な事績を然るべく仕組むも良ろしからう、何れにしてもこの芝居といふものが人事の變化の場合を適當に現出して、兒童をして健全なる常識を發達せしめ、この活動の舞臺に立ちて誤りなき方向に進んで奮闘する基礎を固めることにも、有効であらんことを望みます。

尚ほ在來の芝居を見せてよいか悪いかと云ふお説がありました、私は見せても構はないと云ふ意見であります。

阿 部 莊 二 氏

自分は演劇にも兒童にも縁の遠い方であつて、何方かと云へば此の問題は喙を容れる資格のないものである、御覽の通り至つて無骨者であつて、演劇なんてそんな洒落たものは餘り見たこともありません、又兒童の方も自分が曾て兒童であつたと云ふことの外、兒童には因縁がありません……家にも子供はない……けれども宿題を怠つたとあつては忽ち閻魔帳に黒點を付けられるだらうから、それが怖さに、思ひ浮んだ丈けを話しまじやう、無論結論も何もない、どちらかと云へば問題を呈出する方で解決する方ではないのであります。

さて、人間は娛樂と云ふものが入る、是れは大人にも小供にも入用であります、此の娛樂をニタ通りに分けることが出来ると思ふ一は別に深い何かを含んで居らん娛樂、即ち娛樂の具體的事件其自身が究局の娛樂たる娛樂、一は形而上の稍複雑な意味のある所の娛樂であります。獨樂を廻はすとかメンコを打つとか、テニスとかボートとか云ふも一つの娛樂であるが、此等は前者に屬すべきもので、即ち其事自身が既に完全な娛樂であつて別に複雑な考へはない、無論體育と云ふやうなことが含れては居るかも知れぬが、それは娛樂の立場から見たのではないから自ら別問題であります。

次に複雑な意味をもつて居る娛樂は所謂文藝であります。文藝を單に娛樂であると云ふと、文藝の士は怒るかも知れぬが、文藝の一面はたしかに娛樂であまりす。夫れで演劇はこの文藝に屬するものであります。併し文藝によりて享受する娛樂は、其主體の年齢文野個性(個人的趣味)等に依りて相違がある、同じ音樂を聴いても甲と乙とは感興が違ふし、同じ繪畫を見ても人によりて樂が同じでない。そこで今は兒童と演劇とを結びつけてあるのであるが、兒童と云ふものはどんなものであるか、先づ六七歳頃からして兒童と云うて宜しいと思ひますが、モ一少し大きくなつても兒童ではあります、中學生徒位になると青年と申して兒童と云はぬのが普通の用語例のやうである、故に茲に云ふ兒童とは假りに五六歳頃からして十五六歳位迄と定めませう。

夫れで芝居は娯樂であるからして、大人が之を見て娯樂をするやうに、兒童も之を見て樂むのは好いが、此の文藝とか云ふやうなものはチト六ヶ敷もので、本當にそれが解つて享樂するのは、餘程立上つたものでなければ出來ない、夫れが六七歳位からして十五六歳位の子供に、其の高尚な空想<sup>フワクダシイ</sup>を理解することが出来るかドウか、私は兒童を知らぬから無論當て推量であるが、多分了解は出來得まいと思ひます、兒童が了解が出來得ないばかりでなく、現在の芝居はどうか是も自分は知らぬのだが、芝居として充分價值ある芝居は、甚だ複雑の考へを有つて居るもので、大人と雖も餘程進んだものでなければ分るまいと思ふ。併し小さい子供は芝居を見て喜ぶ、是は事實のやうです、併し是れは實際其の芝居を<sup>コンプレヘンド</sup>了解して喜ぶのでなく、只一々の所作若しくは一歩進んだ所で其の所作の經過丈を見て喜ぶのである、所作の經過の外には何も了得しない。併し芝居と云ふものは、只所作の經過ばかりでなく、全體を<sup>コンプレヘンド</sup>了解したならば、何かあるものがあるであらうと思ふ、若し夫れがなければ仁和賀か時代行列と同じことであらうかと思ひます。

サウすると子供に芝居を見せても、子供には芝居は分らない、分らぬものは見せて費用や時間をつぶすに及ばない、見せない方が宜いと云ふことになるかも知らぬ。又一歩進んで子供に芝居を見せて何か悪影響を來さないかと云ふに……一體此の文藝が悪影響を來すと云ふは、其の藝品に現はれて居る所の空想を、實現しやうと考へる時に來るものである。云ひかへれば空想は單に歌ふ可きものであつて、我々實際の生活に於ける目的<sup>エント</sup>ではないと云ふことを區別せずに、兩者を混同するからして弊害がある、美的生活は嘔歌すべきものであつて實現すべきものでないと云ふやうなことを明らかにしなければならんと思ふ、今これを子供と芝居とに當て、見ると、子供には芝居が分らないのであるから、其の芝居の所作に非常に肉感的の下の品な者の存せざる限り、別に悪影響が起らないと思はれる、夫より歳をとると漸々分つて來るので危険であるが、兒童と云ふ範圍内には、悪影響をば免かれることが出來ると思ふ。

夫から何か芝居を見て利益するかと云ふと、夫れは分らぬのでありますから、只芝居の所作を面白いと云ふ、附たりの方から利益をうけることはあるが、芝居の目的からして芝居の利益を得られないと思ふ。併し教授の方面から考へて見ると、メンシエンクンデーの直觀教授の材料に、必要であると云ふのでありますが、之を教育家の方から見れば萬々歳であります、之を文藝家の方から見たならばドウであるか、文藝家は芝居を教育家の一種の機<sup>インスツルメント</sup>械として、云ひかへれば教育家の手先きにつかはれて色々な注文を受けて黙つて居るか、ドウも斯う云ふことは文藝家の好まないことであらうと思ふ、サウすると教育家と文藝家と喧嘩しなければならんと思ふことになる。尤も芝居は芝居で超教育的に演る、之を教育家がコッソリと大向の鐵格子の外で直觀教授に利用すると云ふは一向差支はないが、表向に芝居を教授の手段にするならば、芝居の存在の理由がなくなる。

斯うなると兒童と演劇とは、永久に縁が切れて仕舞ふのであるが、これはどうかして結び附けることは出來ないか、と考一考するに、兒童には芝居は分らぬが、所作を見て悦ぶ、悦ぶと云ふことは娯樂の主要素であるから、演劇も兒童に取つては全然無意味でもない、この兒童が所作を見て、悦ぶと云ふ點を捉へて、兒童と演劇とを結び附ければ、それは可能事である、即所作を目

的とする児童向の演劇を作ればよい、尤も斯う云ふものは文藝的價値は至つて乏しいかも知れぬが、それから又演劇に仕組れ得る児童向の文學がある、寓話御伽話即ち是です、御伽芝居は一考へると茶番のやうであるが、文藝としても充分の價値が認められる、丁度シェークスピアやゴエーテの作品が不朽であると共にアラビアンナイトやエソップ物語も矢張り不朽の奇寶であるやうなものである。斯う云ふ児童向の藝術を作ることは、其の道の人々の實際問題であつて、私は唯理窟の上から児童と演劇との結合し得る點を推論した丈であります、その解決は私には迎も出來ないので。

それから、斯う云ふ苦心をして、児童と演劇を結び附ける必要はあるかないか、又あるならば何處にあるかと云ふ問題が起るが、是は又児童と演劇とに關する立派な一つの問題であります、併し大概の人は積極的の答をするであらうと思ふ、自分も積極論者に手を擧げたい様に思ひます。

\* \* \* \*  
\* \* \* \*

かくて次回の話題をば、佐々氏より提出の、

『教育の意義』

森氏より提出の、

『青年男女の交際』

の二題と確定し、午後十時ごろ會を閉じた。

## 『児童と演劇に就て』

福 田 琴 月

去月十一日『教育茶話會』席上で、小生が出題にかゝる『児童と演劇』について、十四人の出席會員中、十三人までは小生に反對であつた。即ち小生は、日本在來の劇は、児童に見せてはいけない、といふので、他の諸君は、大體において、見せて能いといふのであつた。

私は、三度の御飯より、芝居が好きで、實私の口から、たとへ児童にでもこんなことがいへた義理ではないのだ。しかし嗜好は嗜好、主義は主義、たとへ、いかに博識なる諸君の言と雖、小生は服されぬ。まだ其上に、少し小生の言が足らなかつた様に思ふから、茲にいさゝか補正し、いさゝか追加する。

小生は、決して、演劇なるものを、児童に見せてはいけない、とは云はなかつた。もしさういふ考なら、去月三日小生が自から筆を取つて、脚本は書かぬ。小生は児童は児童といふ事を、頭において書いた脚本を演ずる芝居の外、児童に見せてはいけないといふ考である。大人に向つて、其嗜好に投じ、其想像力に訴へて、しかも疵瑕多き日本在來の劇、それを見せるのは、斷じて不可であると思ふ。それは、日本在來の劇の中でも児童に見せてかまはぬものもある。が、これは

丁度、日本菓子の中にも、滋養のあるものがあるから、まあどの菓子でも、好きだといへば食べさせておかうぢやないかといふのと同じ理屈で、よしや、二三や、四五、(例之史劇の一部分に)見せても能い物があると云つても、それは一向薄弱な理屈で、小兒には矢張小兒科の醫者がよい。又、何も無理に、大人の爲に造られたる、大きな喇叭(誰れやらの言拜借)を小兒に與へて、無理から娛しまさなくつても、彼等には、かれ等の程度に合して、芝居を書いたら能いではないか。小兒が喜びさへすれば見せておいたら、能いではないか、といふお説もあつたが、それは小兒に向つて至つて不親切なお説で、其劇の全部が小兒に理解が出来て、そして其劇中の滋味美味を盡く感得させるやうにするのが、今日兒童に向つての作劇の必要であらうと思ふ。忠臣藏でも、鏡山でも、小供の喜びさうな奇麗な處はあるが、他の事實の凡てが分らぬから、さういふものを小兒に見せるのは、害あつて益がない。

一言以てこれを掩へば、大人に見せるために、大人の想像を以て、作られた劇は、小生は小兒に見せることを反對する。そんな間に合はせな事をしないで、兒童劇を書いて、演じさせれば能いではないか。無理に古物を應用して行く必要もあるまい。但し小生が兒童の演劇といふのは、敢えて今日の所謂お伽芝居のみをさすのでないから、そのおつもりで。

『教育界』第四卷第八號

教育茶話會記事(第四回)

小笠原 均

話 題 { 教育の意義  
青年男女の交際 }

教育茶話會の第四回は豫報の如く去る五月十一日の午後五時から、神田淡路町の寶亭で開かれた、殊に今回は、幸ひ滞京中の全國各地方の郡視學諸君が多數出席して、種々實際上の談話を試みて呉れたので、會は頗る盛大であつた、今其の出席者を列擧して見やう

鳥取縣岩美郡視學	入 江 澄 君
兵庫縣印南郡視學	岩 佐 米 次 郎 君
三重縣一志郡視學	川 本 覺 次 郎 君
廣島縣比婆郡視學	斜 森 慶 次 郎 君
福岡縣八女郡視學	山 路 忠 夫 君
福岡縣企救郡視學	山 手 知 美 君
千葉縣君津郡視學	有 居 新 平 君
沖繩縣中頭郡視學	本 松 虎 之 助 君

栃木縣那須郡視學	三宅正枝君
静岡縣田方郡視學	清水吉彦君
山形縣東田川郡視學	毛呂百人君
佐賀縣東松浦郡視學	關根義幹君
帝國印刷株式會社專務取締	岩田僊太郎君
東京府立第一高等女學校教諭	市川源三君
	石川半山君
	石川松溪君
『文藝界』主筆	神谷鶴伴君
東京市學務課員	吉田升太郎君
東京高等師範學校教授	棚橋源太郎君
哲學館大學講師	立柄教俊君
	曾根金川君
文學士	矢野太郎君
法學士	山本信博君
東京高等師範學校訓導	松田茂君
	牧口常三郎君
『少年界』主筆	福田琴月君
文學士	佐々醒雪君
東京高等師範學校教授	佐々木吉三郎君
	樋口勘治郎君

例によつて晚餐の饗應があり、當日の話題は教育者の最も注意を拂ふべき好題目『教育の意義』と、昨今世論紛々たる女子教育に關聯したる『青年男女の交際』の二話題であつたから、一題目を捕へても二時間や三時間の演説を試るの勇士は無慮三十人と註せられ、何れも片唾イヤサ麥酒を飲んで待構へて居たが、聽て幹事より一人がタツタ五分間の發言權を許されたので、幹事壓制など云ふ聲も聞えたやうだつたが、何分にもタイムの許さないことは亦如何ともすることは出来なかつた。

曾根金川氏

是れより開會致します、今晚の茶話會は、通常會員の外、地方の郡視學の方々に、多數御出席を願ふ事の出来ましたのは、本會の爲め誠に光榮に存ずる次第であります、それで立ちました序でに、此會の趣意のあるところを一言御紹介して置き度いと思ひます、今日教育上の會とが團體といふものは随分澤山ありますが、併しながら其會の多くは、だゞ教育家が寄つて、教育の事を相談すると云ふのであつて、成程或方面は、微細の點迄研究が出来て居るのであります、私等の見るところでは、どうも大切な方面が、まだ缺けて居るやうに思ふのであります、在來の教育會では教育者だけ寄つて教育の事を相談するのでありますから、もとゝゝ境遇を同じくし、趣

味も似て居り、意見も餘り違つてゐないので、さう云ふ一ツ穴の人々が寄つて相談をするのでありますから、別に大なる反對もなく、相談が早く纏るのであります、併しさう云ふ様に小さい區域に限られた人々だけ集つての相談や決議でありますから、其の考が動もすれば、單調に流れ、或は非常に偏屈に陥るといふことを免かれぬのであります、それで私共は、此の缺陷を救ひ度いといふので、苟も教育に興味を持つて居る人々であれば、教育者たと否とを問はず、可成各方面の方々の賛成を得て、廣い立場から教育問題を解釋して見度い、又時事問題に對する教育的觀察、教育的研究をして見度いといふので、この通りの本會を設立するに至つたのであります、開會以來マダ四回目でありますから、マダ私共の考通りに參つては居りませぬが、行々は此の會員中に教育者もあれば醫者もある、新聞記者もあれば政事家もある、官吏もあれば實業家もあるといふやうにしたいと思つてをるのであります、そして是等の人々が一ツ問題に對して、各種の方面からいろゝ意見を述べたり、或は又種々なる話を互にすると云ふ事になれば、餘程有益でもあり、又趣味も多からうと思つてをるのであります、それで、此會の精神は、さう云うやうな譯であります、私は此の席を利用して今日御出席の視學の方々に、向つて一ツの希望を述べたいと思ひます、それは諸君がそれゝ御歸郡に成りましたら、此のやうな性質の會を起して貰ひたいといふことです、其の地々々々で實業家や官吏や醫者を糾合した教育的團體を設立して貰ひ度いと思ふのであります、そして尚ほ進んで本會と提携をし氣脈を通ずるやうに願ひ度いものと思ひます、さういふことに成れば、諸君が一夕の御出席も、我が帝國の膨張に多大の貢獻するといふ非常な結果を生み出すことに成ると存じます、それから一寸申しませぬが、御承知の通り、今回は二ツの問題が提出されて居ります、佐々君から御提出になりました『教育の意義』と云ふのと、モウツは森君の御提出になりました『青年男女の交際』と云ふ此二ツの問題が出て居ります、それで御出席の方は此二題についてでもよし、又地方の狀況談にてもよろしう御坐いますから、是非五分間演説を願ひ度いと思ひます、處で一度に多數の方が御起立になつても困りますから、幹事から御指名を申し上げます時、御立ちくださる事を願ひます、先づ第一に石川半山君に願ひます。

石川半山氏

私は石川半山であります、今夕は誠に多忙でございますから食事を終つたら御免を蒙らうと云ふ考で豫め幹事に御願ひ致して置きましたが只今幹事の御指名を蒙りましたから御話を致しますが題に出て居る教育の意義、男女青年の交際と云ふ二題共に議論するならば拙も五分間で六ヶしい、其中でも教育の意義と云ふのは先づ出題者に説明を願つてから議論を致した方が宜しい様に思ひます、男女青年の交際に就ては多少平生考へて居る事もありますから、此題に付て一言申しませう、男女の交際と云ふ事は明治の新天地に於て盛んに叫ばれたる新思想の一で有りまして鹿鳴館のダンシング、ボールの時代は随分盛に行はれたる者で有りましたが、其の反動でコウ云ふ事は弊害が有ると云ふ説が高まり、一時盛に行はれたる舞踏會もパツタリ衰へました、然るに近年又青年男女の間に交際を初めよとの議論が現はれて來た、前々回の時松田君で有りましたか、コ、エジユゲーション即ち男女學生を一室に入れて教育をしなければならぬと云ふ御議論が有り

まして私も至極御同意で有りました、學校に於ける男女青年が教師の監督の下に無邪氣なる交際をなすは人の性格を作る上に於て非常に宜しい事であると思ふ、小學校に通學して居る少年時代から男女を合せて教育し男女の間の美しい交際をせしむるは將來の美しい社會を作るに緊要の事と思ふ、段々歳を取つて十七八歳にもなり、青年是を誠しむ色に在りと云ふ時代になつては男女青年の交際も餘程警戒をしなければならぬ、或は西洋では男女の交際が自由で有ると申して盛に交際を始める青年も有りますが西洋の文明諸國に於ては母親が交際場裡に出て居るから母は常に青年男女の監督をして居る決して放縱に勝手に交際をせしめて居ない、思想の未だ定まらない青年男女の交際には監督者が必要で、監督者のない青年男女の交際は甚だ危険で有る、日本のやうに母親が交際場裡に出でずして青年男女の行動を監督しない社會に於ては甚だ危険な事と思ひます、教育上にコエジュケーションが行はれ男女交際が子供の時から行はれて誤る事なく、青年の間は母親の監督の下に交際し、それが婚姻をして母になり依然交際場裡に在て其娘を監督して居る社會になつたならば男女青年の交際は如何に盛大でも少しも危険は有りませぬが、今日の我邦の如く同じ下宿屋に於て青年男女の盛んな交際をなすは最も危険で有る、何等の監督もない下宿屋の二階で血氣に満ちたる青年男女が交際は自由だの愛は神聖などと言つて居るのは危険千萬と考へる、願くばコエジュケーションが行はれて少年時代から男女交際をなし母親が交際場裡に出で、男女青年の交際を監督すると云ふ社會を見たいと思ひます。

佐々木吉三郎氏

教育の意義と云ふ事は、色々の見方がありませう。私は心理的に見た方から申しませう。心理的に見たる方の意義は、下の一例でよく分ります。私の友人に、寢坊な人がありまして、私と一緒に部屋に居りましたが、自分は起きても、其先生は何時までも寐て居るので、誠に困つて居りました。然るに、之にも増して困つたものは、鼠の進撃で、鼠が始終やつて來ては、ソコラ邊の茶菓子の残りなどを喰ふので、これは、私も友人も、共通の利害を感じる困つた問題でありました、處が或る日、栗を田舎から貰ひましたので、其の殻を盆に入れたまゝ、床の前に置いて寐たことがありましたが、フト思ひついて、友人にかういふ相談をしました、『今夜栗殻を食ふ爲めに鼠がやつて來ると思ふが此處の障子を細目に明けて置いて鼠の這入つたのを見届けて、しめ切つて、鼠を征伐しやうぢやないか』と云ふたら、友人が非常に賛成をして呉れました、處が、鼠の大將、果して床前へやつて來てガタゝ、させたので、流石の寢坊先生も、(常には、揺り起しても眼のさめぬ先生が)私よりも先に目を覺まし、鼠の退路を遮斷すべく、障子をピシヤリと締めてから、『君イ鼠が這入つたよ』と云ふて、私を起して呉れたのであります。私は、寢坊の先生に起されて、起き上つて、征伐に着手して見ると、大きな鼠が二匹も這入つて居りましたから、悪ツッキ曲物御參なれと友人ともゝゝ、箒、座布團を以て呐喊し、首尾よく二匹の鼠を征伐したことがあります。私は、其の時、ハハー『教育の可能』とか、『教育の心理的意義』とか云ふのは、要するに此の一事に過ぎない。適當な機會を見てコチラの適當と思ふ事項を示し、相手の納得する所となると、そこに、一寸此の人間一人では思ひつくまい又は出來まいと思ふことでも出来るものである。此社會的とか個人的とかいつて争つて見ても、ソレハ唯、コチラの適當と思ふ、

事項を制限する一条件たるに過ぎないもので、教育の眞髓といふものは、コッチがよいと認むることに納得させることに過ぎないといつてよいだらうと、かう思つたことであります。

教育の個人的意義社會的意義も面白い問題であります、私は、本統の教育といふものは、社會的兼個人的であるべきもので、ドレカーツでなければならぬが如くにいつて居るのはノボセテ居るのであると思ひます。

有 居 新 平 氏

自分は本會に初めて何つたのですが、今夕はむしろ自分の従事して居る職掌柄の事を御話する方、幾等か便利と思ひますから甚だ勝手ではありますが、不斷従事して居る業務上から考へて居る處のことを御話し致しませう、東京市内に御いでの方には、實際田舎の學校の状態に就ては、充分に御分りになるまいと思ひます、今日、學校の仕事の上に就ての役者は、申す迄もなく教員であります、教員と云ふものの中には、代用教員もあれば、檢定試験に依つて資格を得たものもある、又師範學校の卒業生もあります、其の中で教員に適當なるは師範學校の卒業生でありませう、ところで自分の見る處に於て、少しく遺憾なりと思ふ事は、師範學校の卒業生が、小學校に赴任する際の心情についてです、實に此等の人々は、小學校教師となつて居る事を耻づるのでありまして、今に檢定試験を受けて中等教師になるか或は高等師範に入學して中等教員にならうと云ふ一つの希望を持つて赴任するのであります、極端に云へば、制服だけは着て居るが、帽子や外套は全然紳士風で、官吏とか銀行員のやうな風をして、教員以外のものを装ふて居ると云ふ有様であります、それでありますから、學校の實際即ち自分の仕事と云ふものに對して全く力を盡すと云ふ事なく、只生計を營む爲めに俸給を取つてそして傍ら自分の研究と云ふものに力を注ぐと云ふ風になつて居るのであります、そこで三年五年経験を積むも、成績があがると云ふ譯でなく、實に學校の仕事の上から見ると、甚だ遺憾の點が多いのであります、是等の事は自分の郡や自分の縣のみならず、全國一般小學校の教員の状態であらうと思ふ、二三日前に東京市内の教員の實際を調査した所に由つても、是等の種類が多々あるやうに思ひます、自分はこれは教育社會に於ける病的現象であらうと考へる、それで法の上から教育の待遇に就て考へて見ると、年々其の年功の増俸をすると云ふ事であるが、其の實際に於ける状態は如何と云ふに、明治三十年前後三十二三年頃が、最も待遇の上に就て極度であつたと思ふ、其の際には、全國の至る處、待遇も餘程厚くなりまして、各府縣の小學兒童の督勵の事も八釜敷くなつた爲め、其の一般就學數が殖えるやうになり、學級が増加する、教員の缺乏を告げるといふ譯で、教員の待遇もよくなり、先づ一年毎に増俸があつたものである、所が三十五年三十六年と云ふ事になると、大いに教員の數も殖えて來て、自然それ等の方法も替つて來て、是れ近年々増俸して居つたものも、自然出來なくなつたと云ふ事になり、殊に時局に際して、尚ほ其の度を加へたのであります、戰爭は教育の方に餘り影響しないと云ふけれども、其の實大いなる打撃であります、第一教員其もの、人物とか功績とか云ふ方から論せず、安い教員が止まつて、高い教員を罷めさすと云ふ事になり、高いものは多く休職となつたやうな有様であります、さう云ふ事から考へて見ますと、矢張り今云ふ處の教員が進んで中等教員に従事する考を持つのも、無理のない事であらうと思ひます、そ

これで私は、此のこのことの大救治策を講ずるのが、今日の急務であらうと思ひます。

岩 佐 米 次 郎 氏

私はいつも小學教育を有効にしたいと思ふのであります、それで小學を終つたものに對して如何にして宜しいかといふことが問題であらうと思ひます、學校に於ては始終學んで居るから、讀み書きの事は迂濶ながらも覺えて居りますけれども、其の卒業後は直ぐ忘れて仕舞ふ、我郡ではそれを救ふ爲めに、町村至る處に青年會のやうなものを設立して、教育を有効にする道を講じて居ります、けれども只今の有様では、中々青年が集らぬ、又青年自身が自分の前途の事に就て、色々向上の道を開くと云ふ事もしないのであります、そこで私は平素欺ふ云ふ疑問を持つて居るから、諸先生なり學者諸君に申して見たいと思ひます、それは普通教育機關の社會上に於ける地位、即ち社會上に於ける小學校の地位如何と云ふ事であり、ドウ云ふ解決を下して宜いか、殆んど今日では、其教育者の活動區域が明瞭ではありません、かういふ席で、此の疑問を解いて貰へば、誠に仕合せと思ひます。

本 松 虎 之 助 氏

自分は沖繩縣から來て居るものでありますので、私には逢ふ人毎に、君は芋ばかり食ふて居るのか、又琉球はハブがゾロバ、出て人を食ふさうなが本當かなど問はれるのであります、このよ一に、琉球と云へば、丸で野蠻のやうに思ふて居る人が多く、又君は、到底野蠻國の教育家たることを免れぬなど申す人もありますが、そんなことはない、殊に教育と云ふ方面に就ては、比較的能く出來て居ると信じて居ります、設備も内容もマア自慢してよいと思ひます、學校は師範學校、農學校を始め何れも備つてをります、現に中川視學官が御出でになつた時も、琉球教育は中々良いと云はれて大變御賞めに預つたのであります、それで曾根先生に御願申し度いことは、琉球教育を時々『教育界』紙上に御紹介を致して貰ひたいといふことです、今日は斯ふ云ふ慾望を以て此席に出て來たのであります。

山 路 忠 夫 氏

私は御承知のやうに、昔川上臯帥や熊襲の居つた九州のはてから參りましたが、私の居る處は、歴史上忠とか孝とか云ふやうな觀念は決して他に譲らないと思ひます、さういふやうに一般に純朴で、今日問題に出て居る青年男女の交際と云ふ様な事は私共の考に浮ばんであります、私は郷里に居りまして、東京にハイカラと云ふものがあつて、女らしい男、男らしい女が居ると云ふ事を聞いて居りましたが、十四五日前から此地に參りまして、若い男女を見まして、ハハハ是が所謂ハイカラであらうか、是が青年男女の交際の真相であらうかと、直觀した位でありますから、日本全體を見渡して考を述べることは出來ませぬ、併しながら、諸君が青年男女の交際と云ふ事について、御考を決定せらるゝ以前に、我が八女郡のやうなところがあるといふことを御承知の上で御研究あらん事を願ひます、一言それ丈けを申して責を塞ぐのみです。

松 田 茂 氏

今夜は新來のお客に喜んで時間をお譲り申します、只規定といふこと故、一言二ツの宿題に對して簡単な答案を出します、第一に教育の意義とは、ドンなものかといふに、一言で掩はゞ、教

育は鍍金術では無い、教育と鍍金術とを混同し、人の子に鍍金を施して表面を胡魔化すといふことは、一寸氣の利いた様に見えるけれども、鍍金されたものはやがて剥げる、剥げた後には艶も光もない地金になつて了つて、其のままでは地金の役も勤まらぬ、不幸なものとなつて了るのであります、金は金色に銀は銀色に、銅鐵は銅鐵色に、ドコ迄も其の天與の光澤を發揮せしめるといふことが、眞の教育の仕事であらうと思ひます。

今一つの問題の青年男女の交際と云ふ事に就いては、斯う思ひます。元來男女を隔離するといふことが、兩者の品行を壞る最大の原因であつて、男が女を珍らしがり、女が男を重寶がるのは、共にお互ひを誤解して居ることから起るので、親しく相接近せしめたならば、女は男を了解し、男も女を了解して、然程珍重なものでもなく、然程結構なものでもないといふことが解つて來る、だから、男女は幼少時代からして、密接に交際せしめ、互に融和せしめて行くといふことが、健全な社會を構成する上に、極々大切なことであると思ひます、或る新聞などにはよく元祿時代の男女の交際を例に取つて、男女を接近せしめることは、風俗を壞亂せしめる大原因であるかのやうにいふけれども、我が國民の知識は多少發達して居る、随つて當時の失敗を繰返す様なそんな不健全な國民ではなからうと思ふ、勿論其の間には、千に一ツか萬に一ツ位づゝは不都合なものも出來るでありませう、しかしそんなものは、如何なる方法を用ひたからと謂つて免れることは出來ん、苟も社會に居る以上は、何時か男子は女子と相接觸する機會があるし、女子は男子と相接觸する機會がある、危険だから隔離して置けといふことは、會々接觸した場合に、猛烈な潛力を一時に爆發せしめる所以で、危険は更に甚しいことと思ひます、青年男女は宜しく交際せしむべし、只過渡時代に於ける用心は、周到ならんことを祈るのみであります。

入 江 澄 氏

博識賢明なる諸君の御集りの席に出席することの出來たのは、私に取つて光榮と存ずる次第であります、扱て教育の意義に就ては、學者の意見も區々であります、私は、大膽にも是に向つて聊か自分の考を申して見やうと思ひます、教育其ものが人類のみに爲すべき事に決定され、人類心意の發達と云ふものが解決されたならば、此意義が能く分かる、例へば今夕の西洋料理にして、我々の體軀の營養分になるとならざるとは、各人の胃の強弱に由ると考へる、其の通りに心意の發達したる人格の高いものが、旨く發達するのである、そこで心意をよく發達させるのもさせないのも、一ツに此の教育の力にあると信じて居る、そこで教育の意義を一纏めにして申せば、各個人の品性をば、社會の要求に應ずべく、最も有效に圓滿に發達させる處の事業と私は信ずるのであります

斜 森 慶 次 郎 氏

私は先刻幹事の曾根さんから御注文になりました事に就ては、歸りました後、此事を地方に盡力して御希望を充し度いと考へて居ります、此度び吾々が購習<sup>(ママ)</sup>に參りましたについては、講習其のものが第一に有益なることは勿論であります、其の以外に、私の教育上利益になる事に就て、何か土産を持つて歸らうと思つて居りましたところ幸にも此會に列する事が出來まして、誠に諸君に對して深く謝する處であります、就ては地方にも此の様なる會を起し、將來此會と聯絡を通

じて互に提携して、吾が地方の教育を振興させ度いと思ひます、さて本日の問題の青年男女の交際に就ては、吾々の地方に於ては、一般に交際しつゝあつたものであります、處が小學校の教育が出来て、却て其の間を離れたやうな感じがあります、しかし一體地方に於ては、男女は交際しつゝあつたので、特に今日男女交際をさせぬと云ふ事は、自然に遠ざかつて居るやうに思ひます、殊に今晚此の問題を聞いてから、一層男女交際は最も今日の世に適して居らうと云ふ感じを起したのであります、聊か地方の状況を申して、責めを塞ぎます。

山 手 知 美 氏

私共は教育家諸君の御話を聞くばかりのつもりで、今夕此の會に出たのであります、併し吾が軍艦と露西亞の軍艦とが相對した時の様に、準備をして居らぬからと云ふて、對手になることを斷る譯には行かないのと同様に、幹事の御請求に對して、斷る譯にも參りますまい、それで私は福岡縣の事をチョツト御話しますが、我が福岡縣には、本會の様な教育俱樂部といふ會を設けて居ります、是は本會の成立以前に設立したものであります、又本會と同時に小倉市に設けられたものがあります、是は第四回目を開いたのであります、其の外筑後に於ても起つて、第一回の會を開くと云ふ事になつて居ります、さて今夕は、我々の疑問となつて居る問題を提出して、本會で御研究を願ひ度いと思ひます、そは何のであるかと云ふと、女子教育の根本目的であります、即ち女子の方針に就ては、二様の極端に奔つて居る處のものが存在して居つて、甚だ危険の地位に居りはせぬか、實に學校に由つては、突飛的な教育の方針を取つて居る處もある、又随分遅れ勝ちの處が見える、誠に女子の教育の方針は、今日疑問になつて居ります、私の奉職して居る處は、第十二師團の所在地であつて、病院もあり捕虜も居ると云ふやうな譯で、先づ茲を見るならば、軍國の有様を現じて居る、それで女子の教育は、亞米利加風に學理上に於てせんければならぬと云ふ事になつても、それは出来ないのです、併し軍隊は男子のみに由つて組織されて居り、戦は男子の仕事であるから、女子は何んにもならぬかと云ふと、無論さうではない、仕事は男女分業的にやらなければならぬ、それで自分共は、此の點から其の女子教育の方針を定めたいのである、それは兎も角、本會の如き有力なる方々のお揃いところで、かういふ問題を決定して貰ひ度いのであります。

毛 呂 百 人 氏

私は、本夕諸先生方の御議論を承つて、さうして後學の助けにしようと思ふ考で參上致したので、昨日幹事よりの御手紙に對する御返事にも、拜聴に行くと思ふ事を申して置いたのであります、併し折角此處に立ちましたことありますから、一言自分の希望を述べて置き度いと思ひます、東京の方々の主張せらるゝことが、地方に及ぶ影響は、中々案外なものであつて、中央に於て起る事は、忽ち地方に及ぶのであります、ところが地方では中央の真相を穿つ事は難いので、只其の半面のみを窺ふ事が出来るばかりであるから、其影響は却つて反對の現象を來す事がある、例を擧げて申せば、樋口さんの活動主義を地方に於ては、放任主義と誤解し極端なことをやつてをるところがある、總て地方に影響する事は、斯の如く大なるものでありますから、此の邊の事をよく研究されて、而して弊害の起らぬよーに御注意があつて、自己の御主張を唱道して貰ひ度

いのであります。

清 水 吉 彦 氏

私が男女の自由交際に就て第一に申したい事は、元來男女の自由交際と云ふ本質及可否は何れにしても、男女の自由交際は、日本の状態に於てはまだ適しないと考へる、既に新聞などにも書かれて居ります通り、今度の戦勝は、見る方面に由りましては、我が國の家族制度が、戦勝の一理由となつてをりますと思ひます、既に或る地方の兵士等が、郷關を出づるに當つては、郷里のもの家族のものに勵まされて、鞏固なる精神を持つて、戰場に臨むから、此の如く戦争に勝つのであると云ふ事は事實であらうと思ふ、然るに男女の自由交際と云ふものは、此の家族制度を破壊するものである、自由交際は自由結婚を意味するもので、自由結婚の家族と云ふものは、猥りになりがちなるものである、男女の自由交際すると云ふ事は危険で、何れの方面から云ふても、吾國の維持繁榮をはかる爲めには、男女自由交際はいかぬと思ふ、モウーツは日本の現状に照して見るに、日本の女子と男子は、兩々比較して同等に近い處であれば自由結婚も宜いが、一方は下つて居るから、男子に對していつも屈服するのである、それ故に男女交際と云ふものは、甚だ危険であると思ふ、此の意味から云ふても、自由交際は不可であらうと思ふ、尚ほモウーツは、富の程度から自由に交際することの不可なる點を見るのである、男は女の愛を得ん爲めに自然不相當に金を費すやうになる、さう云ふ性質を持つた處の結婚は、いかぬと思ひます、要するに吾々の唱ふる處は、先づ今日ではマダ危険であると思ふから、青年男女の交際を非なりとする意見であります。

三 宅 正 枝 氏

今夕の問題になつて居ります教育の意義を、私共が解決すると云ふことは、中々六ヶしいのであります、さりとて何時迄も五里霧中に彷徨して居つてはならぬから、ドウなり一ツそれに對する考を定めて置く事は必要である、それで私は斯う云ふ風に考へたらよからうかと思ふのは、成るべく現時の社會の状態に考へて、今後の社會の要求に應ずるやうに考を向けて、さうして教育をして行き度いといふのです、しかし只現在の社會の模様を見ましただけでも、未だ充分とは云はれませぬ、何となれば唯今は過渡の時代であるから、秩序的に進歩して居るのではございませぬので、随分其の中に這入て見ると、悲觀的の考を持たなければならぬやうな事もあるからです、それで現在社會の缺點を列舉して、一ツツ、に段々取調べて行けば、今後の社會の要求に應ずる方法が立つであらうと思ふ、至つて取留めない考ではございますけれども、先づ教育の實務に當つて居るものは、さう云ふ考へを以て行つたならば、蓋し誤りが少ない事だらうと思ふて居ります。

關 根 義 幹 氏

私は佐賀の唐津にをるものでありまして、今度講習會の爲めこちらへ參りましたが、恰度日本人が初めて倫敦や巴里にでも行つたやうな調子で、電車を見て驚くと云ふやうな人間で御ざいますから、私は只諸君の御説を承る外はありませぬ、(此の時氏は一段聲を高くして)けれども是非一言せよとのことでもありますから申ませう、段々御説がありました、教育の意義と云ふ事

は、今日本會が説明してをると思ふ、即ち教育のことは、先づ社會的に考へて、人と人との關係、或は青年未成年者に對して一定の考案を持つて居らなければならぬと思ふ、ドウしても今日の教育に就ては、社會的の方面から考を持たなければならぬ、換言すれば、父兄の考と先生の考と二様になつて居ると云ふ風では、決して教育の道は立たぬのであります、此教育の意義を明かにして、父兄迄も其の考にせなければならぬと思ふ、それから私の青年男女の交際に對しての考は、誠に簡單なものであります、昔しに遡つて見たならば、今の世に於て或は兄弟の間に言はれぬ事もあつたらう其時代には平氣であつた、それ故男女の交際も、時代に由つて聊か變るものであつて、男女の交際は、少しも不都合な事がないと思ひます、若し不安に思ふならば、女子を悉く殺して仕舞ふ外ないのである、ローマのクレオパトラは女の鼻が曲つて居つたら宜かつたと云ふたが、そんな心配は無用である、少數の墮落者はあるかも知らぬが、それは過渡時代のことで、必ず近き將來に於て秩序も整つて來ると思ふ、又日本人は決して極端なる墮落をするやうな事はないと信じて居る。

立 柄 教 俊 氏

私は格別氣焰を上げる程の事もありませんが、少し意見を述べませう、教育の意義に就ては、只今唐津の先生の御話に大體賛成です、併し後半の青年男女の交際に就ての説には、反對であります、教育の意義と云ふ事は、之を一定する事がむづかしいと思ふ、それは教育は色々の方面から見るのできるもので、即ち其教育をされる方から見、或はする方から見、又は其目的から見て色々の差が生ずるのであります。之を制限して學校教育とか家庭教育とか狭い範圍について考へれば明瞭になりますけれども唯一般に教育といふときはその意義は到底一致し難い。即ち私共の主として研究した専門的の教育ならば教育とは成人が未成人を具案的に養成することなりと云ふ事が出来るであらうが、漠然と教育の意義と云ふことになるとそれは意義が明瞭にならぬ、それでありますから、私の考へますには教育の意義は學校教育ならば如何社會教育ならば如何普通教育ならば如何専門教育ならば如何自然教育ならば如何と斯う云ふ風に制限してその意義が始めて明瞭に極まるであらうと思ふ、それ故一つの定義にては一致し難い、すべて教育の根底に於ては佐々君の御話のやうなことも含まれてありませう。併し一般に教育といへば最も廣く教育に通じたもの最も廣い概念を以てその意義を定めねばならぬ、今では此の廣い意味を適當にあらはす詞がないのでありますが、先づ之を教育と云ふ詞にてあらはすとしませう。此の廣い教育は今十分に研究されて居らぬが家庭又は學校の外に社會又は自然と云ふものが人に及ぼす影響は甚だ大なるものであるから之れをも廣く見て一つの教育とせねばならぬ、さう云ふ方面を併せて研究するならば社會學人類學等をも參考せなければならぬと思ふ、只心理とか生理とか云ふやうな學のみではいかぬ、かく教育を廣く研究する事になると學校教育、家庭教育、社會教育、自然教育と云ふ風に部分が分れるであらう。而して其の各部門の間に聯絡が付く様にならねばならぬ。さうして色々の力の聯絡が付いて學校教育家庭教育等相待ちて教育を全うすることゝなる。若し部分を分けてその範圍を明かにせざれば所謂教育者に分外の事を責むることゝなり、又教育者は狭い範圍に局まりし他の廣き關係を考へざる爲めに十分に其の本來の任務を盡す能はざることゝ

なる。それで教育と云ふものは之を完全にしやうとすれば人間一生に於て受くべき一切の勞力を含んで居ると考へねばならぬ。學校に於ての教育のみならず新聞小説の類が人を教育するの力は殊に大なるものである、それであるから都で人を陶冶する力を持って居るものが皆教育であるといはねばならぬ……これが最も廣き教育の意義でありませう。

樋 口 勘 治 郎 氏

私も幹事の一人として、地方郡視學諸君の御來會下されましたのをごく簡単に孔子さんの言葉をかりて、『有朋自遠方來不亦樂乎』と云ふ意味を以て歓迎いたします。諸君、此の教育といふ高尚なる事業の爲にお互に協力して日本國の爲に世界一般の爲に盡す道を講ずるのは何より楽しいことではありませんか。其所で此の教育の事業が、何故に高尚であるかといふことを考へなければならぬ。其れは教育は人間社會の進歩發達の爲に、我々人間……人類が考へ出した所の最も賢明なる作用であるからであらうと思ふ。生物學などが吾人に教ふる所によつて見ても、過去の進歩發達の結果を尚ほ後に傳へることが出来るものが、よくもろゝの競争に勝ち、諸種の階級の上に位することが出来る。然るに教育は過去の社會が工夫し出した結果、所謂過去の文明の生産物を保存して、尚ほ其の上に何物をか積上げて子孫に傳へる作用である。社會は其の生存と繁昌とのため、其の進歩と發達との爲に教育と云ふ仕事を發明したのであらう。此のことを擴張して十分成功した所の國が益々熾んになつて行くのであらう。是れが爲に、教育が社會の仕事の中心になつて居ると云ふても宜い。又之れを個人から見ても我々は自分一身のことを考へると云ふよりは、自分の子供のことを考へるのが切なるものである。我々が足手纏になつても構はないで妻を有つ、此の妻帶すると云ふことも、只美しいものを見たいと云ふばかりであれば、道を歩行くものを眺めれば其の方が妻帶したよりは餘程よい美人を見ることが出来る。然るに人と云ふものは割れ鍋に綴ち蓋、それ相應に妻帶すると云ふことは何の爲であるか。是れは決して自分の現在の爲でない。過去の爲でもない、子孫の爲である。我々が子供の養育の爲に心を注ぎ殆どすべての物を犠牲に供してをしまないのは、個人から見ても種族の繼續、文明の遺傳といふことが、生活の中心であることの證據であらう、と思ひます。

斯の如きものであるから教育と云ふものは、常に一步先きの方を見る。現社會よりは一步進んだ所のことを見て、未だ現社會に實現されて居ない所、世の中の多數のものが希望せぬことでも、教育は之れを唱導するのである。テ佐々木君の主張せらるゝ所の『來い來い』主義、自分が先きに行つて後から次いで來いと云ふことになるが、併し現社會よりは一步進んだことで、世の中の人了解しない、世に了解せられないから我々は此の世の中で屢々軋軋不遇ではるのである。軋軋不遇は教育者の甘受せなければならぬことである。教育の方法に就て佐々木君の云はれた『來い來い』主義、是れも成程自分の地位が高ければ夫れもよいが、併し私は活動主義、即ち『行け行け』主義であつて、マー先程の佐々木君のお話のあつた様な場合にも、自分が先きに起きて起すのは面倒であるから、自分は寐て居つても人を起してやると云ふ様にしたい。即ち『行け行け』主義で、人をして活動せしむると云ふを主義としたらよからうと思ひます。

次に女子教育に就て、方針を定めよと云ふお説がありました。私は『女子をして男子の協力者

たらしめよ。競争者たらしむる勿れ』と云ふ。男子や女子を個人からばかり見ると遂に尊卑だとか、獨立だとか云ふ議論が出て来て、ドウしても女子は男子と競争して行かねばならんよ一になるが、社會的に見ると、女子と男子とは互に其の缺ける所を補給して行かなければならぬ、女子は如何なる方面に働けばよいかと云へば、子孫を生産すると云ふことが本務である。又男子は文明を築き上げる方に従事すれば夫れで宜い。夫れで何れが尊い卑いもない。違つた方面の仕事に従事するのである。

男女交際をさせることには賛成であります、併し餘り無暗に交際させることは賛成は出来ぬ。其の女子の程度相應に交際させなければならぬ。只此の問題に就いて教育者としては何をすればよいか、私の考へでは危険があつても交際をやらせると云ふことは能くないことであつて、其の危険をば教育者が矯める、即ち救ふと云ふのが、教育の最も尊むべき所であらうと思ふ。お前方が間違た交際をすれば、必ず其所に理學的、生理的に、當然必至のプロタクションが生ずるぞ、と云ふことを、理學の鏡によつて、見せておきさへすれば、自由に交際させても滅多に危険はありますまい。教育者が青年男女を教ふる時に、アフリカの黒奴の人数をかぞへたり、北海の熊の毛色をしらべたりはするが、大事の大事の男女交際の心得などにはこはがつて、又はおかしがつて手をつけないからよくないのであります。

矢野太郎氏

先程から段々面白い有益な御話を承りました、是れで今夜新しく此の會に御出での方々の御話は大略承つたと思ひます、他の諸君の御話は、次ぎに承る機会があると思ひますから、自分は少々風邪ですから、今日は是で失禮を致しますが、立ち序でに今日の問題に對して、自分の定義の様なもの丈け申上げて置きます、自分の定義は、平凡な定義であつて、一攫みに申せば、一體教育の價値は、古來特に昨今甚だ過大視されて居ると思ふ、自分の考に由れば、教育と云ふものは、人間を凡化するにあると云ふ考である、即ち一般の人間を平凡にするのが教育である、言を換ゆれば、或る時代に於ける教育は、其社會に於ける平均知識——知行合一の意に於て平均知識を一步進めるべく、或る事を爲すことである、随つて青年男女の交際に於ても、是に由つて自分の意見を立てる事が出来ると思ふ、少數のものを犠牲にしてまでもやるべしと云ふのは、自分の所謂平凡主義に反對である、甚だ失禮であるが、是で御免を蒙ります。

山本信博氏

私の商賣は少し違ふので、教育に對しては全くの門外漢でありますから、教育の意義とか云ふやうな六づかしいことに就ては知識は有<sup>(ママ)</sup>ちません、又教育に關した書物を讀んだこともない、如何にも不案内であります、併しある學校で教へて居る、自分が生徒を教へて居りながら趣意のないことをして居つてはすまぬが、併しマー自分は、教育家ではない技手であります、只幾許か教へて居るのは、先刻から皆さんが仰つたやうな譯でやつて居るのではなくして、只若いものが一身を立てる上に便宜を與へると云ふ考へで、即ち暗示を與へて居るのであります。『來い來い』主義でも、『行け行け』主義でもない、只暗示を與へて居ります。併ながら何れにしても若いものが、一身を立てるに便宜を得、サウして社會文明を築き上げたならば、夫れで教育の眞價は有

つてゐやうと思ふのである。

青年男女交際に就ては、私は交際させることには反対である、松田君の云はれる所は甚だ危険であらうと思ひます、私の考へでは男女、殊に若い男女を自由にサウ交際させることは甚だドウも宜くないと思ふ、松田君のお説のやうに、男女交際した所が大した危険はあるまいと云はれるのは、論者が夫れ自身が餘りに潔白に過ぎるのであらう、夫れで自身に比較して他を推すものと認めてよからう、併しナカ、世の中の多數の人は、サウ潔白の人ばかりでないと思へばならぬ、彼の學生一般の下落した目下の状態を察して見たならば、男女殊に青年男女には交際にも制限が必要であらうと考へる。

吉 田 升 太 郎 氏

私は矢野文學士の凡化説を奉ずるものでありまして、従て私の説は平々凡々であります、扨佐々先生の御話の教育の意義に就ては、平素考へて居ります、自分は長く地方の視學に従事して居りまして、其の疑問が學校の門に入ると屹度頭の中に湧き出るのであります、教育の意義に就ては、自分は一定の明瞭なる考を持たないが、只此問題の出たのは、お前達はドウ云ふ考を持つて居るかと思ふから、及第點になるかドウかと云ふ事は分らぬが申します、一體學者は其の教育の意義を教へてくださらなければならぬ、我々はドウ云ふ風に學者の言ふことを理解して居るかを御答申せば、それで宜いのであると思ひます、一體教育と云ふものは何者にするかと云へば、人間にするのであります、人間とは何であるかと云へば、是は主觀的方面と客觀的方面があるのである、即ち倫理學上から見る時は、道德的人格と見る事が出来る、又は人類學又は動物學等より見る時は、それ、見方が違ふのであります、兎に角人間は主觀的と客觀的との兩方面から見なければならぬから、教育も亦其の考を持つてか、らなければならぬ、又教育には絶對的と相關的との意義があるのである、人間はたつた一人で此世にあるものではない、されば絶對的にも相關的にも見なければならぬのである、そこで人間が二人ある以上は、社會が成立つて又國家が成立つて、随つて、法律があるといふ譯で、絶對的にのみ見る譯にいかぬ、ドウしても相關的に見なければならぬ、是迄は兎角絶對的に又主觀的に見たのであるが、人間は生きたものであるから、是非客觀的にも見なければならぬ、パンがなくても宜いと云ふ風に、只主觀的にのみ見る處のヘルバルトの教育主義はいけぬと思ふ、一體學者といふものは、左程エライものでない、私は子供の時に聞いた事があるが、群盲大象を摸するといふことを、マーソンナもので學者の教へてくれる教育の意義は、教育といふもの、一部である、吾々は色々の學者の言ふ事を凡化して事實に當筈まるやうにしなければならぬ、即ち社會の要求にも従はなければならぬ、人間は絶對的に見た丈けではいかぬ、先づ學校教育に就て言ふならば、普通教育は、殆んど教育の絶對的意味を實現し得る立場に居る、が相關的意味を大に加へなければいけぬ、『教育界』に此間御園生視學と横井博士との討論があつたが、何れにも道理があると思ふ、今日師範學校にて教へて居る教育學は、人間を主觀的客觀的、絶對的相關的の各方面から見て居らぬやうに思ひます。

牧 口 常 三 郎 氏

私は只今では斯う云ふ眞面目な問題を議論する資格はございません、併し私も先頃お話ししたやうに、永く教育に従事して居りましたもので、斯う云ふ境遇になつても教育に対する趣味は離れません、而已ならず自分も前にやつて居つた事柄でありますから、教育の意義に就いて一言したいと思ひます。

従来教育上疑問として居つたことがある、如何なる疑問であるかといふと、子供を教へるとしても、子供は一體ドウしたら宜いだらう、教へた結果がドウなるだらう、其結果は父兄が満足するかしないか、満足が出来ないとすればドウしたら善いだらうと云ふことが疑問でありました。其所で私はドンな風のやり方でやつたかと云へば、其の時に於てドウ云ふ教育學をドウしてやつたら宜いかと云ふことを研究してやつたのであります。其の目的は何であるかと云ふと、即ち具案的に或は個人の方面から、或は社會の方面から見たのであつた、所で將來夫で宜いだらうか、或は父兄が満足するだらうか、若し不満足であるとするると其所で疑問が起る。教育を骨を折つてやつて、十分の効果が現はれて、其効果が自分ばかりでなく、社會も認めてくれればよいが、若し現在のやり方に就ても、不満足を抱かれて居ると云ふことであれば、然れば、其の目的から割出した教育と云ふものが矢張り満足せぬと云ふことになる、それで先刻誰かの云はれた素地を作ると云ふことが、目的で、父兄の要求は顧みない、夫れで満足するかと云ふことが疑問となる<sup>(ママ)</sup>のである、ところで、其の意義が、文部省から出された明文によつて違つて來たから、其の教義から違つて來たのであります。又、在來の學校教育の目的と方法を具した今の其の明文の方に就ては、明文の通りに云はして置く外は仕方はないが、其の意味に於て夫れだけは確定したが、即ち其の所に尚疑問が残るのであります、私は其の疑問を決定するだけの知識はないが、疑問だけのことを述べて置くことが、諸君に判断を願ふことに宜からうと思ふ、抑も教育のことは、父兄の希望を顧んでも宜いだらうか、顧みる必要はあるまいか、一般多數の需要を顧ないでも宜いであらうか、これが私の疑問であります、尤も、父兄の希望を入れつゝも少しく其の意味を限定する餘地はあるじやないかと云ふ議論もありませうが、兎に角個人的と社會的に分けると、父兄の方は個人の限定であつて入れる必要はないが、教育學説のみによると斯うなる、教育の學説に就ては、世の中の最も進化したことを信じて居る學者が、矢張り生活問題に就て苦悶する、ドウしたら宜いだらうと、斯う云ふことは立派な教育大家でも、自分の子供になると教育以外に於て生活問題に顧慮する、少くも生活問題と云ふことに迄及ぶ、此所に至つて生活の素地を求めると云ふと、素地ではあるが今のやり方は鐵に鋼を加へるのでなくして、金とか銀とか云ふものを、片寄つたものを包みつゝありはせんか、現在の教育に養はれて居る生徒は、生活問題に遠ざかつて、地金以上になつて居る、私は生活問題を加へた地金にして行きたいと思ひます、樋口先生の社會教育主義も入れ福澤先生の獨立自尊も入れて、獨立自尊以上の人間を作ると云ふ意志でやつたならば、立派な教育が出来やうと思ふのです。

神谷鶴伴氏

私は青年男女の交際と云ふことに就て意見を述べますが、私は青年男女を交際させると云ふことには無論反對でございます、此の議論に就ては抽象的に反對されたお方もありますが、私は

實例を挙げやうと思ひます、今樋口君がお仰あつた通り、男女交際には危険はあるが、危険は構はないから男女交際をさせると云ふことは酷く殘忍<sup>むご</sup>いと思ひます。好いわ、構はないわと云うて、自分の子供の墮落するのを捨て、置く、例へば此の先きの方に行けば池がある、夫れを知らずに行けば落ちるけれど、注意もしないで追放してやると云ふことは、随分、殘忍<sup>むご</sup>話しであらうと思ふ、苟くも教育家を以て任せられるものが、斯かる無慈悲なることを云ふのは、實に私は涙が出る、先達ても、日本女學校の生徒が、情死したことがある、是等の實例に徴して見ても、モ一争ふ可き餘地のないことで、即男女交際の弊害であらうと思ひます、其の女生徒の親たちの考へと云ふものは、兎に角ドウか人並優れた豪いものにしたい、豪い御亭主を持たせたいと云ふので鉞や鎌を握つて汗を絞つた金で、兎に角東京まで出して勉強させる、夫れで其の子が遂に情死をしたと云ふやうなことであると、其の親心と云ふものは、實に腹が立つだらうと思ひます、サウ云ふことがあるのは何が<sup>(ママ)</sup>原かと云へば、男女の交際に基く弊害であらうと思はれる。男女の交際にドレだけの利益があるか、利益がある所ではない大弊害がある、斯んなことは止めた方が宜いと思ふ。

例を挙げれば幾許もありますが、昔からの小説に就て云うて見ると、彼の近松がよく情死ものを書いた、紙屋治平とか曾根崎心中とか、近松の作の中で一番何が出來がよいかと云へば、彼は情死もので成功して居ると云ふてよい、サウして近松の作を見ると、皆な情死するものに同情を表して書いて在る、其の子に情死しられた親心と云ふを書いたものはない、死ぬものにばかり同情を表して居る、斯う云ふ文學と云ふものは既に人を墮落に導く動機になる、ドウか斯う云ふ場合に文士が筆を執る<sup>(ママ)</sup>ならば、其の親心と云ふものを取つて書いたならば世道人心に益することであらうと思ふ（この時請ふ隗より始めよと呼ぶものあり）斯う云ふ墮落した人を作ると云ふのは、皆な男女交際から起る弊害であると思ひます、斯う云ふことはドウかないやうにしたい、又教育者たるものは、男女に交際をさせるなどと云ふサウ云ふ無慈悲な考へをお出しなさらぬやうに希望する。

川 本 覺 次 郎 氏

教育の意義と云ふことに就ては、私の云はふと思つて居りました通り、諸大家のお説を拜聴いたしましたから申しません、青年男女の交際と云ふことに就て、自分が實際困つて居ることに就て申したい、私は青年の男女は交際させたいと云ふ方の論者であります、併し餘程其の間に困難がある、今田舎の景状を見ると、斯う云ふことになつて居る、田舎の山間の小學校へ女子の教員を配當してやる、サウすると女子の教員が困る、何故困るかと云ふと、其所等田舎の人等は、男教員と女教員と何か咄をして居つたとか、又其の女教員が誰か土地の男子と交際をしたとか云ふやうな時には、色情の外には男女の交際は無いものと思つて居るので、チョツと女教師と誰か男子と咄をして居るのを見ると、いろゝゝなことを附加へて新聞杯に投書する、サウ云ふ有様で實際女教師は交際も何も出來ない、實にドウも困る。此の事に就て或る人が云ふには、女子に餘計教育をさせることは、餘り宜しくないと云ふたが、併しそれは女教師の罪ではない、只社會が困らせるのであります。サウして見ると此の社會をば十分改良して行かなければならん。其所

で此頃男女共學の説もありますが、明治二十八九年頃、丁度今から十年前迄は男女共學でありましたが、十年ばかり前に法令上何歳となれば別にしろと云ふやうなことが出来て、私共其の當時異様に考へた、今では法令に従つて男女を別に教育して居るが、是れは私は共學論がよからうと思ふ。

今承る所によると、上は大學より中學邊りまで、大分東京も墮落して居るやうであります、希くは東京中の人が一ツ考へになつて、改良して貰ひたい男女交際はモー少し範圍を擴めて、男子と女子とお話も出来るやうに願ひたい。是にはいろゝゝ手順もありませうが、ドウか十分改良して貰ひたい、東京を十分改良してサウして地方に及ぼして貰ひたいと云ふことを特に希望いたします。

市川源三氏

教育の意義に就ては私は斯う考へて居ります、教育と云ふものは前社會を吾人の前に現はすもので、教育者は前社會を吾人の前に現はすカラクリ屋である、博覽會の案内者のやうなものである。夫れで教育の心棒フロベスと云ふものは、社會と云ふものが眼の前に現はれて、夫れを教育者がカラクリして見せるだけのことで、或は博物學を適當に順序をつけて見せる、斯う云ふものである。

夫れで後進を感化した如く感ずるのは、之れを催眠術に就いて云ふと明瞭であります、催眠術の何者であるかを知らない人がある、斯う云ふ人には催眠術は雇らない、催眠術と云ふものは人を眠らせ得るものであると云ふ説明をして置かなければ催眠術に雇らない、夫れは何故であるかと云ふと、其の催眠と云ふものは吾人がかけてじやない、社會がかけるのだ、教育もサウである、教育者がするのではない他の社會がするのである、サウ云ふ風に解釋すると、現在の社會のダイナミック發達に順序を縦から見せたものでないから、一番低い所から高い所まで見える、大學は教授であつて教育でない杯と云ふたのは間違つたことである。大學は高い所に小學校は一番低い所に見せるばかりのことである。

サウ云ふ意味に於て男女の交際を論ずれば、現在社會の交際の態を試せば宜しい、現在社會は男女が交際をして居るが、實際には交際して居らぬ、何方の奥さんを見ても交際して居らぬ、此の社會にないものを青年に示す必要はない、サウ云ふものを示すから間違たイリージョンを起こさせるのであつて、由來教育と云ふことはサウ豪い大きな考へを抱くものでない。一種の取次屋である、諸君の法螺話も憤慨談もあつたが、期う解釋をして見ると明月を望む如くであります。夫れで小學校の二三年級などの女だか男だか、サウ云ふ考へのない所ではコエジユゲーションでも宜しい、男女交際でも宜しい、肉眼で未だ戀想するやうに至らん迄は交際しても宜いが、其の以上になつては交際すべきものではなからうと思ふ。

岩田櫻太郎氏

教育の意義、青年男女の交際、此の二問題とも大抵盡されたやうであります、私の考へを申せば、教育の意義は立柄君のお説を賛成し、青年男女の交際は石川半山君のお説を賛成いたします。

石川松溪氏

私は本夕は何も申さない考へで居りましたが、青年男女の交際に就て、聊か意見を述べます。段々諸君の御説も承りましたが、私は積極的に青年男女を交際させると云ふことを主張するものであります。諸君の御説を承ると、消極論の火の手が大分熾んでありまして、松田君や關根君の折角のお説がドウやら破れさうな形勢でありますから、私も據なく起立して一方を防がねばならぬと云ふやうな譯になりました。

只今神谷君からも慷慨悲憤の反對がありました、私はそれは甚だ杞憂ではあるまいかと思ふ。此の青年男女間の交際に就て消極論を唱へられるのは、丁度日露戦争前に非戦論を唱へたのと同様のこと、考へる、青年男女が交際したからと云うて、何もさう恐れることは決してない、教育者がモット奮發して、立派な品性を有する國民を作り、假令青年の男女が手を握り合つて交際した所が、直ぐ其の皮相の觀察からして、色だとか戀だとか云ふやうに解釋せぬやうな、高尚な思想を有つて居る國民を作りさへすれば、それで差支ない、又其の青年男女は、男女の交際を以て間違のない立派な交際をすると云ふ様にさへあれば、何の差支もない。又教育者たるものは一歩進んで男女間の交際は神聖なものであると云ふ迄に國民一般の知識を進ませる様に盡力せねばなるまいと思ふ。

由來日本人の癖として、何か一ツ缺點がある、例へば數萬の女學生の中一人が不品行であるとか、情死したとか云うて、夫れを以て女子教育を根本から破壊しやうと企る人もあるが、是等は丁度農民が丹精して作った麥の中に少しばかり黒穂が出て來た、農民が夫れを見て憤慨して麥の耕作を廢するのと同様なものであらう、數の多い中にはドウも斯う云ふことは何事にも免がれ難いことである。要は社會改良の一手段としても女子教育をもつと高潔にすれば宜しい、決して消極論者の心配するやうな譯のものではあるまいと思ふ。

尚ほ大體論になりますが、現時の教育者は何事も引込み思案でドウも困る、心配し過ぎてドウも困る、サウ云ふ有様である故に、國家の根本を築き上げる所の、教育と云ふ大事業そのものが、動もすると社會の片隅によせられて仕舞はふとする、遂には文部省廢止論など云ふ亂暴な議論が起つて來るやうになる、モ一少し教育者は強くあられたい、モ一少し活動的態度に出て貰ひたいと思ふ。

\* \* \*  
\* \* \*

右の演説を終り、次回の話題をば棚橋氏提出の  
女子教育の方針

と確定して、一同十二分の歡を盡し、午後十時半頃會を散じた。

此の記事の終りに於て、一言添へて置き度いことは、佐々、棚橋、福田等の諸氏も、有益なる意見を述べられたのであるが、恰度其の時自分が離席した爲め、乍遺憾こゝに紹介することの出來なかつた一事である、尚ほ前記諸氏の筆記中、或は演説者の意を誤つてをる點があるかも知れぬ、此段は、平にお斷りを申して置く。

教育茶話會記事（第五回）

小笠原 均

六月十一日午後五時半、豫期の如く、神田たから亭に於て、教育茶話會の第五會が開かれた。今回も地方の群視學諸君が多數に出席して呉れたので、會は頗ぶる盛會であつた。例によつて先づ出席者の顔觸れから紹介しよう。

埼玉縣北葛飾郡視學	大熊實三郎君
愛媛縣周桑郡視學	安家重政君
廣島縣比婆郡視學	斜森慶次郎君
長崎縣壹岐郡視學	榮田清紀君
山口縣阿武郡視學	片山元造君
島根縣大原郡視學	阿部榮重君
岐阜縣武儀郡視學	和田不二男君
長崎縣南高木郡視學	山田忠君
熊本縣下益城郡視學	藤井敬愼君
東京府立第一高等女學校教諭	市川源三君
帝國印刷株式會社專務取締	岩田僊太郎君
	石川松溪君
東京高等師範學校教授	棚橋源太郎君
文學士	阿部莊二君
東京市學務課員	吉田升太郎君
	曾根金川君
文學士	山本信博君
	樋口勘治郎君
文學士	佐々醒雪君
畫伯	宮川春汀君
	福田琴月君
文學士	矢野太郎君
『教育』記者	牧口常次郎君 <sup>(ママ)</sup>

晚餐の最中、日本海の海戰勝利を祝さうではないかといふことで、棚橋君の發聲で、一同天皇陛下萬歲、日本海軍萬歲を三唱した。夫から例の五分演説にかゝる前、曾根幹事から、幹事一名増加のことを圖つて、一同同意し、直ちに矢野太郎君を煩すことゝなつた。

愈々宿題の『女子教育の方針』について各自意見を述ぶることに成つて、樋口君が先づ立つた。

樋 口 勘 治 郎 君

近來女子教育が盛になつたについて、其の方針を研究して明瞭にすることが急務になつて來ました。女子教育の方針については、色々の説もあるやうですが、私は賢母良妻説をとつてをります。賢明なる吾等の祖先は昔から賢母良妻の四字を女子教育の方針として居ました。私は是が過去に適したるのみならず、現在にも適し、猶未來にも用ひらるべき方針だと信じてをります。今其の理由を述べて見たいと思ひますが、其の理窟は個人主義からはつきませぬのであります、個人を如何に教育すればよいかと云ふ事になると、人各々特別の天稟本質境遇を有つて生れて居りますから、是に適する様な教育をするのが然る可きかと思ふ、或は神功皇后の如くヂヤンダークの如き軍人をつくるもよからう、ナイチンゲールや紫式部や小野の小町やクレオパトラ、其れゞ、其の個人の望む所適する所の教育をするがよいでありませうが、而し教育と云ふ事を營む所の社會、若しくは最つと現實的に云ふと國家が如何なるものをつくる事を方針とするか、即ち大多數のものをばどう教育すればよいかと云ふ事が、今夜の問題であらうと思ひます、さうすれば第一に賢母をつくと云ふ目的でなければならぬ、賢であつても母でなくてはならぬ、子供をこしらへなければならぬ、子供をこしらへない様な女であるならば全體の點から言つたならば不完全である、不具である、何れの國家も天壤無窮に永く續くと云ふ事が目的であらねばならぬ、而して又強くなければならぬと云ふ事は辯を費すまでもない事と思ひますが、其れがために第一に人口が多くなければならぬ、西洋の誰かの言葉に、人口の多いのが富強の原因だと申ました如く、人間を殖すと云ふ事が非常な大事な事である、其れがために女をして賢母であれ良妻であれと云ふ事が必要であります、斯の如き事は唯今の日本では問題になりませぬ、年々五十萬づつも人口が殖るのでありますから……所で、女子教育の仕方に依つては、母でない様な女も出来る、他の國の例をとつて見れば、彼の佛蘭西の婦人の中に多く見ゆるが如きものが出来る、其れではなりませんから、教育の方針と云ふものは賢母をつくる事でなければ成るまいと思ひます、次には良妻、是れも言ふまでもない事の様考へますけれ共、女子教育が進むに従つて女子が職業を選び、獨立する様になる傾きが見える、獨立の職業を以て吾は家族の一員ではない、直に國家又は世界の一分子であると斯う言ふ考への者、男などの世話になるのは女子の品格がさがる、獨立自營で、世間を横行濶歩しようなどいふ者が段々と出て來るやうに思ひます、獨り々々に言ふたならば、さう云ふやうに自分の勝手に 自分の 才藝自分の 伎倆自分の 見識等を以て、思ふまゝの事をして行かうと云ふ者が社會の裝飾のため、社會をして復雜ならしめんがため、社界を進歩せしめんがためにある程度まではあつても構はんのみならず、ある方がよいのであるがさういふ者をつくることを方針とするわけには行かぬ。例へば社會には罪人があつてよい。ある度までは無くてはならぬが犯罪者をつくるといふことは經世者の目的であつてはならぬ様なものであります。社會は繼續し、生存することを第一の目的とする、子供のある事を目的とする、獨立して夫を持たない、結婚をしない、夫妻の關係を好まないと云ふ女子は、即ち國家の、此の目的に背くのである、斯の如き理由であるから女子と男子とは獨立せしむべきでない。互に競争すべきもの



くして、常識が不十分であるから、男の仕事を理解しないと云ふ事になり易い。立派なる高等な教育を受けた方は別として、先づ普通の女は理解しない方が少くないと思ふ。然るに近頃女子に特別な教育を與へると云ふ事を云うて、地理、歴史、理科等を教へないで、女には特に女に適切なる教育を授けなければならぬと云ふ事が教育者の一つの問題になつて、此特別教育と云ふ事に就ては、是は實際的の方面に於ては殊更賛成をするものが多くなつて居るが、それは鼯負の引倒しで、甚だ宜しくないと思ふ。私の考では、是からの女は一通りの常識を發達せしめて、専門の事をもやり、一家の妻君としては缺點なき迄に知識を養ひ、又理科の知識をも養ひ、又進んでは地理、歴史及び世界のあらゆる事柄を知らなければならぬと思ふ、さうして若し子供が西洋に行くと云ふならば行けと云ふ風になつて、決して狭い了簡を持たないやうになり度いと思ふ。さういふやうに一般的陶冶さへ出來て居れば、自然夫の爲す事を理解し、世の中の事を理解し、又は衛生の事をも理解すると云ふ風になるは當然である。さうなれば別に家事の時間を増すと云ふやうな事をしないで宜いと思ふ。そんな色々な事をせんで文部省の教則はダマツテ置いて宜いと思ふ。即ち私の考では、今では先づ一般的陶冶をすれば宜い、現在の教則で宜い、色々な心配をし、急に改良をしなければならぬと云ふやうな事はいらぬと思ふのである。

阿 部 莊 二 君

今日の話題は女子教育の方針と云ふのであるそうですが、此前には男女交際の可否、此度は女子教育の方針、兎角女と云ふ字が離れない、是も當今の時代思潮が此處に現はれたものであらうと思ふと面白い、女子教育に關する私の考は矢張大體今棚橋君や樋口君の御話になつた通りで宜いと思ふ、棚橋君と樋口君の説は大した差がないと思ふ、何れも女としての女を作ると云ふ趣意に外ならぬ様に聞えた、女子教育に就て賢母良妻と云ふことが云はるゝが、これは確か三四年前或る文部の大官の始めて云はれた言葉と思ふが、私も矢張りそれで宜い、それより外に云ひ様がないと思ふ、併し能く考へて見れば賢母良妻と云ふ言葉は一見否一聞非常に具體的の言葉のやうに聞ゆるけれども其實頗る抽象的である、何となれば母たり妻たる者が何様なことをするかと云ふことは決して一定して居らぬ具體的でない、これゝ、これゝ、が母たり妻たる者の必ず爲すべきことで其より増すことも減ずることも出來ぬと云ふ様な事柄は決して具體的に分らぬ、妻たり母たるのが婦人の普通の約束であるから、賢母良妻を準備すると云ふことは、普通十人並か百人並かの女を作ると云ふことで、云はゞ人間を造ると云ふ様な漠然たる言葉と同じで、只男と女と違ふと云ふ言葉があるだけで實は細かい中身が這入て居らぬやうである、教育の方針と云ふ事は細かく一々學校でドウ云ふ事を教へるかと云ふ要項の選擇も一の方針である、又一般に通ずる方針があつてどういふ風にするかと云ふこともある、此の題の出題者は細かい事を學校でやる事を主として相談しやうと爲らるゝのかも知れぬが私は細かい具體的の話は關係的のものであるから逆も十分に説き定めることは出來ぬと思ふ、それで矢張り一般の方針に就いて云へば、どうしても賢母良妻の方に賛成と云ふ外ない、併し只さう云ふただけでは雲を攫むやうな話であるが實際それよりは立ち入つて云ふことが出來ないのであるが、それをもう一言言換へて見ると無論抽象的に止つて具體的でないが、常識を養ふに在りと思ふ。今日の問題の女子教育と云ふのは普通教

育即ち小學より進んで高等女學校の事であると思ふが、普通教育は一般にどう云ふ意味の者か、教育全般に關しては、『教育界』の時評にあつた通りで至極結構なヒUMANISTICKの解釋で自分の賛成する所であるが、普通教育は特に常識を養ふと云ふ事が目的となつて居ると云ひ直しても宜いと思ふ、常識と云ふのは生きて居る處の即ち活動して居る社會に關する活きたる常識である、知識は社會にばかり關係して居らぬ、天然に關係したものもある、併しこの生命ある人生に關聯して了解されて居る知識は其對象の何たるを問はず皆常識である、例へば猫の話をして猫の骨格は如何、齒が何枚とか猫は何類に屬して居るかとか云ふ様な事は靜止的であつて活動せる生命ある人生より離して解釋したものである、又猫と云ふものは可愛とか肴が好きであるとか子供を嫌つてお婆さんを好むとか、又は黒猫三毛猫赤猫白猫がある三毛の男猫は滅多にないとか、赤猫は年を取ると躍るとか云ふ様な事は活きた方の知識もあると思ふ、これは例であるから區別は甚だ拙いが、活動して居る社會即ち人間の情に關係して居るものが常識であると思ふ、常識は具體的で實際的のものであります、即ち小學で教へる事も中學で教へる事も皆さう云う事を教へるのである、併し實際は又此に他の要件が少し宛加つて居る。

例ば小學では國家と云ふ處から非常に種々附加へて居る、小學の事は國民教育と云うて居る、國家觀念と常識とは意味が違ふ、常識の根本的意義は何處までもリベラルなヒUMANISTICKの者である。

處が小學で國家と云ふ觀念の要素は多く這入つて居る、國家は社會の維持者であるから、此位の要求は尤な次第である、それと同様に中學でも國家と云ふ觀念が這入つて居るが、更に今度は中學校と高等女學校と別れて居る處から男子と女子と違ふので各異つた要件がは入る、男と違ふ要素と、一般常識を養ふと云ふ要素とが結び付いたのは、女の中學校即ち高等女學校の教育である、賢母良妻を作るとは其を指したのに過ぎぬ、であるから私は女子の教育の方針は賢母良妻であると云ふことは別に珍しくもない代り動かすべからざることと思ふ。

専門教育も女子にやつて良いか悪いかと云ふ事があるが、専門教育は今日の問題になつて居らぬが私の考では専門教育を受けやうと云ふ事を望むならば充分に與へて差支ないと思ふ、イツであつたか斯う云ふ御話があつた大學の卒業生に對する需要がモウ澤山であるからモウ卒業生を殖さなくても宜いと云ふ説があつたが、世の中から大學の卒業生の需要がないと云ふ理由で以て入學を停止すると云ふやうな事は理窟が違ふ、大學は契約的に世の中の注文に應ずる人物養成所ではない、大學生は米國から追ひ返される契約労働者とは違ふ、女子に在つても是と同じやうな譯で専門教育を受けると云ふものがあるならば受ける方が宜からうと思ふ、尤も是には行政上から二つの約束がある、一は國家經濟の上から其の設備が出来ないと云ふこと——これは常に起るところの條件で設備をしたい事が山々だが、どうも出来ぬと云ふのです、前の大學の例も實は是が眞正の理由なので大學を擴張したいのが山々だが、經濟上出来ぬと云ふのがほんとうの理窟です、卒業生の需要がないから擴張しないと云ふのは、擴張する必要がないと云ふので、必要はあるが出来ぬと云ふのと、必要がないと云ふのとは非常なる相違であります、それからモーツは警察的意味で女子の高等教育は有害であるから禁止すると云ふのです、併しこんな事は誰も考へては

居らぬでしやう、要するに私の考は普通教育に對しても専門教育に關しても至極寛容な態度なのであります、で特に本日の問題であらうと思ふ普通の教育の範圍ではエモーションと云ふ靈氣に依つて活動して居る社會的の知識即ち常識の養成を以て方針とすべしと云ふ意見であります。

吉田升太郎君

先夜は時間を正直に守つた爲め男女の交際に就ては自分の卑見を陳べる事が出来なかつたから今晚の問題につきては敢て卑見を陳べ度いと思ひます、先夜も申した通り、矢張り私の教育の主義は凡化説である、教育と云ふものは人間を作ると云ふことは申迄もない、男も女も人間であつて、男を離れて女がなく、女を離れて男がない、男女を離れて人間がないのである、そこで人間はドウ云ふものかであると云ふと、第一生存しなければならぬものである、生存する爲めには男は女を離れて生存せず女は男を離れて生存しないものである、そこで男女が夫婦となつて家族が起らなければならぬ、家族が集つて社會が起らなければならぬ、社會が起つて而して進歩したる人間になるとそこで國家の成立を見る譯である、男子の教育の方針でも大學者を作るとか専門の教育を興へるとか云ふ事は一般教育の意味の範圍であると思ふ、教育と云ふ事は先程棚橋君の陳べられた如く陶冶と云ふ意味に解すれば専門教育は別に考へなければならぬ、男子の教育の如く女子の教育は女子の陶冶にあるとすれば賢母良妻と云ふ事は世界を通じての眞理であると云はねばならぬ、しかし賢母良妻と云ふ丈けでは其内容が分からぬ、寧ろ形式である、斯ふ云ふ處から色々の説がある所以であらうと思ふ、詰り私の考へでは良妻賢母と云ふ事は時と處に應じて其内容が違ふだらうと思ふ、それであるから日本は日本、西洋は西洋、又日本でも幕府時代は幕府時代の賢母良妻で明治時代は又明治時代の賢母良妻でなければならぬ、そこで賢母良妻と云ふても今申す通り内容が違ふから一概に言ふ事が出来ぬ、勢ひ其内容に就て言はなければならぬ、其内容に就ては樋口君と阿部君との間に多少行違があつたやうであるが、要するに私の考では明治の時代に於ては男子と同じく明治の社會に相當する女でなければならぬと思ふ、先程棚橋君が尾崎學堂先生の女が男子の事業趣味を了解して呉れぬ程悲しい事はないと言はれたと云ふ事を申されたが、成程其通りで教育なき女子に事業趣味を解せよと云ふても其解すべき心が出来て居らぬから解する事が出来ないのである、阿部君の常識論と云ふものが私の申す凡化説であらうと思ふ、高等女學校で教へて居る諸學科は男子の事業趣味を了解するに必要であるものであるが、其程度が問題である、常識を段々高くして行かなければならぬ、どうしても賢母良妻主義でなければならぬ、賢母良妻主義の上から高等女學校の寄宿舎の制度に就て多少意見がある、中學の寄宿舎に就ても師範學校の寄宿舎に就ても今日の現状では良くないと思ふが況して賢母良妻を養成の方針とする高等女學校に於てをやである、一體賢母良妻となるべきものが寄宿舎の合宿的の室に在つて賄番の拵へたる食物を食して居つては到底其の目的を達することは出来ぬと思ふ、賢母良妻主義から言ふならば世間の家庭より一步進んだる模範的家庭を想像しなければならぬ。

それで日本の今度の戦に勝つのも色々な原因があらうけれども其中最もなるものは家族制度によるものと思ふ、即ち家族制度の精華が現れたからであらうと思ふ、故に此の家族制度の長所はドコ迄も保存して行かなければならぬ、此の理想から私は寄宿舎の設備管理方法に就ても自分の

關係した處の寄宿舎に就ては特別の設計を立て、此賢母良妻主義を實現すると云ふ目的に適はしむるやう寄宿舎に就ては多少苦心したのであつた、賢母良妻主義は亞米利加でもさうであらう、悉くが獨立主義の教育を要するものであるとは認められぬ、それ故日本では能く日本の現状に考へ今迄の歴史に考へて今後の進運を見込みて不都合のないやうの賢母良妻を作らなければならぬ、大體に就て樋口君棚橋君の御高説に敬服いたします、が聊か蛇足を加へました。

市川源三君

自分が娘を持つて居つて娘の教育について苦慮して居ると云ふならばモウ少し適切な考が起るであらうと思ふが、若し娘があつても尚斯う云ふ説を吐かれるとすれば娘が可愛くないと云はねばならぬ、私は職務柄高等女學校の生徒の卒業する際に當つては必ず父兄の相談に預るが其時に當惑致すのである、今日の人々は感情が進歩して居つて親が子を愛する度合も強くなつて居り又た愛さなければならぬと云ふ知識の方の度合も進んで居る、昔しは離婚が多かつた、四組の結婚があるとその一組は離婚した。然るに民法發布以來は少々減じて六組に一組の割合になつて居るが中々多いと云はねばならぬ。次に日本は文明になつたばかりであるから、高等の生活をして居るものが弱い、先づ東京に居る人は早く死ぬ婦人は未亡人になる<sup>(ママ)</sup>可能が多いやうである、又は死なぬとしても軍艦に乗るとか外國へ留學するとか商用で他出してゐるとかと云ふ場合が多くその場合にはいつも夫と別れなければならぬ、斯う云ふ風な事は地方に比べて多いやうである、さうして若し早く夫に死なれたならば再婚すれば宜いのであるけれども餘程感性が進歩して居るから再び結婚する事は好まないと思ふ有様になつて居る今日は倫理で二夫に見えずと説くよりは、感情が説いて居るようである。それであるから本人に聞いて見ると獨身の方が宜いと云ふて居る、それを統計で以つて示す事が出来ないけれども兎に角餘程女子教育に向つては地方に於てするのと東京に於てするのとは違ひたる意味を持つて居る、そこで女子を教育するにドウ云ふ方針を執らなければならぬかと云ふと、御承知の通り、第一案は賢母良妻主義に加へて良姑主義と云ふ事である、第二案は獨立自活主義、第三案は常識主義である、併し第三の常識主義と云ふのは前二者と頭を併べて主義とはならぬと思ふ、換言すれば、前案は勿論常識を養成したる上に更に何物をか加へんとして居るのであるからである。従つて賢母良妻良姑主義は常識主義と云ふものとは互に衝突して居ない。併し其實賢母良妻良姑主義と常識主義とは全く同一では無いと思ふ、何んとなれば妻になり母となり姑になると云ふ事は或る特別な訓練法がなければならぬ、それから又獨立自活をするにはそれに就ての特別な方法を考へなければならぬからこれは勿論常識主義とは違ふ。そこで是等の中何れが宜いかと云ふと詰まり私の考では賢母良妻良姑主義が最も宜からうと思ふが、更に、獨立生活する爲めに特殊なる教育を受けさせた方がよいと思ふ。前にも云うた通り今日の社會に於ては獨立する事が出来なければ悲惨の境遇に陥ると云ふ恐れがあるから一方には職業の教育と云ふものに就て考へなければならぬ、賢母良妻主義と職業主義とは兩立しなければならぬ、女子は多く獨立すると云ふ實際の考がない處から色々な弊害が起り或は柔弱になり色々な誤りを起すと云ふ事になる、是は自から依頼する事が出来ないと云ふ事から起るのである。又夫の留守である時に獨立し得る資格が無いと良妻たる資格を失ふことに成り易い。イノ

クアーデンをして悲惨の最後を遂げしめたのはアンニーに獨立生活が出来資格がなかつたからである、又獨立が出来資格がないとすれば生活の爲めに人に依頼しなければならぬと云ふ事になつて子供の教育も存分出来ない場合もある、それから女の貞操を全うするに就ては如何であるか微力ながら生活が出来ると云ふ事であれば二夫に見えずと云ふ事も出来るが獨立自活の考がないと云ふ事になれば勢ひ女徳を敗る事があり勝であると云はねばならぬ、それ故に賢母良妻良姑主義は職業主義を結合したものでなければならぬと思ふ、そこで男子は普通教育の外に高等の教育及び職業教育を受けるが賢しき夫良き父と云ふ教育は受けない、女子は家を治めるに就ての特異なる教育を受け其外に職業の教育を受ける事になる。それ故其外に高等教育を受ける事が出来ないのである、地方に於ても三十年四十年を経たならば現在の東京の如くなるであらうが今の東京に於いてはかう云ふ主義で無くてはならぬと思ふ。

曾 根 金 川 君

私の考では、女子教育の方針を良妻賢母にありとするのもよいが、更に高い考を以て教育とするといふことを忘れてはならぬと思ひます。即ち、女子も矢張り人としての教育を施すことが最も大切であると信じます。苟くも人としての性格が陶冶されれば、適く所として可ならざるなしで、妻となれば良妻となる事が出来、母となれば賢母となる事が出来、姑となれば良姑、教師となれば良教師といふやうに、なる事が出来るのであります。殊に婦人の中には、到底人の妻となる事の出来ないものもあれば、又妻となつても母となる事の出来ぬものもあるといふことを考へておかねばならぬ、かゝる女子に向つて、ただ良妻賢母主義で教育したならばどうであります。その本人は到底折角受けた教育を實現することが出来ないのでありますから、そこに非常の失望が起らねばならぬ、實に悲惨な結果を見るやうなことがあらうと存じます。然るに人としての教育が出来てをれば、如何なる境遇に臨むも、よく身をその境遇に處して誤らぬ事が出来るのであります。そうでありますから、私は、この大切な考を忘れた良妻賢母主義には、賛成が出来ぬのであります。私は此の間某氏の哲學字典に論理學とか心理學とかいふ大切な文字が落ちてをつけて載つてをらぬ。それで著者の方にその譯を正すと餘り大きな術語だからつい落したのだといふ話を聞いた。又、ある學校で、備品臺帳に茶碗や毯どは細かく附けてあるのに、大きなボードが書留めてなかつたといふ話も聞いてをる。兎角誰でも大きな大切なことは、やゝもすれば忘れ易いものである。女子教育の方針についても、ただ家事とか育児法とかいふようなことには早く目が附くが、肝心の本人の性格を築き上げるといふようなことは、却て忘れられ易いものである。私は敢て良妻賢母主義に反對するのではないが、更に人としての教育が最も大切であるといふことを一言して置き度いのであります。

斜 森 慶 次 郎 君

先きに種々御議論あつた通り、女子教育の方針に就ては、私は賢母良妻主義に賛成する所の一人であります、近頃女子教育の方針に就て、種々の議論がありますけれども、何れも我國の事情に適切でないと思ひます、殊に獨立自營主義など云へる議論が餘程盛に持囃されて居る様なれども、此等は人種國體の異なる泰西の風俗を、直に我國に應用せんとする極端なるものでありま

すから、とても實行することは出来ないのみならず、實行すべきものでないと思ひます。男女は相待て社會を組織し、女子と男子とは別々に社會をなすことは出來ますまいと考へます。又一説には人間開化の進路を見ると、男子が女子の跡を追ひつゝあると云ふ説もあつて、随分趣味のある問題で、私は大にさう云ふ珍説を拜聴せんと希望致しますけれども、今日私の信ずる所にては、男女の性格を比較して、到底女子を標準として男子が其經路を辿ると云ふことが、果して開化の原則であらうかは、私には容易に信ずることが出來ません。要するに女子は女性の特質があるから、其の長所は長所として認め、其短所は短所として認め、何處までも男子に随伴して行かなければならぬと思ふ。さうして十分に賢母良妻の責任を盡す上には、自營の必要を生ずることなきにしもあらず、獨立自營は賢母良妻主義を完うする上に於て必要なるものにて、是を以て女子教育の方針とすることは出來ません。故に私は賢母良妻主義に賛成するものであります。

榮 田 清 紀 君

良妻賢母とは主義賛成であるが先づ九州地方では女子の教育は中部の東京府の教育を多く見習ふ事になつて居るやうである、先づ例へて見ると先刻御話もあつた通り東京の女學生は髪といひ衣服と云ひ袴と云ひ一般に華美である、其華美の風習は直に地方女學生が眞似をやる、彼の海老茶袴が流行し出した時にも早速吾々の地方に流行して來つたのであります、東髪が東京に流行したるときも直に眞似た様に、其習慣風俗は地方に分布して之を手本とするやうになつて來るのである、吾々は東京に參りまして女子の風に驚いたのです、先刻ドナタか御話になつた通り袖は地を掃ひ髪は旅順港と云ふやうな變な風で、實にドウも華美に流れて居ると云ふ事を感じたのです、マダ、吾々の處にては小學校の生徒では長い袖のものを着て居らぬ、大概是短かくして居る、それから成るべく袴は着せると云ふ事にして是には賛成したのである、併し海老茶の袴を着てゾロ、した風は好まぬ、吾々の方では普通の縞の木綿の袴を着せて居ります、モウ少し經つと東京の長い袖でしかも海老茶の袴で而して普通のものでなくして段々上等な袴を着て裾で地を拂つて學校に行くのが段々延いて吾々の地方に來たらそれこそ大變な事ではあるまいかと云ふ事を憂いて居る、成る程都會の地では左程目立たないが村落になると兩親は鎌鋤持つて働きに出る、或は商人ならば其相當の風をして肩に天秤棒を擔いで商に出る、然るに其子供は親と全く違つて海老茶の袴を着てゾロ、して居るものがある、斯う云う風になつて來たならば教育の進歩が外形から這入つて來るか知らぬが吾々の考へでは良妻賢母を作ることが出来るや否やをあやしむのである、只外形の風采ばかりでなく其内容に至つても東京の教育の有様風俗等の全體が地方に流れ込むと思ふ、だから吾々は教育大家たる諸君に向つてモウ少し華奢な風を改良して賢母良妻の手本を養成して貰ひたいと思つて居る。

和 田 不 二 男 君

私の思ふには大體樋口先生などの御意見に随つて宜からうと思ひます、先づ教育と申しても色々見方があるので一面は時代の要求に應じ一面に時代の缺陷を補ふて行かなければならぬと思ひます、是迄餘り男女の教育の懸隔して居つた爲に女子は男子の爲す事に就て充分理解が出來ないと云ふ有様である、既に男子の思想及趣味を了解する事が出來ずとせば所謂共同の生活をする

に就て不便である、それが爲めに男子の事業が或は十分發達成功せぬと云ふやうな事もある、それ故に男子の教育の度に比較して男子と協同調和すべき程度に女子の教育の方針を立てたいと思ふ、市川先生の言はれる特殊の教育と云ふものを女子の本能から考へ又我國の現状より見て之を否認するのである、生活の困難なりと云ふ事を豫想し従て婚姻問題の困難なるを慮り女子の獨立自營に資すべき特殊教育の必要を認め兼ねるのである、郡に於て女子五萬八千人の中三十才以上の未婚者を調べたものがあるが極めて少數なものである、私は女子は婚姻と云ふ事を終局の基として男女協同生活の調和の下に方針を定めたら宜からうと思ふ。

次に一言希望を陳べたい事は此次の茶話會は視學制度に就て諸先生の意見を聞いて見たいのである、さうして出来る事ならば此會に今一度席を聯ねて又田舎もの、希望をも色々陳べて見たいと思ふ、世上往々郡視學の執務に對し皮相の觀察を下し視學なるものは唯就學の督促出席の獎勵表簿の檢閲設備の改良等外形にのみ留意し絶えて教育の内容實質に付て何等考案せざるもの、如く誤らるゝは甚だ遺憾である今や官制改正の結果郡視學は一層緊要なる機關となつた、成る程或時代は比較的多くの力を外形上の事に注ぎたることもありしが之は自然の順序である曩に小學校令改正に伴ひ義務教育の普及を計り大に就學を督促し出席を獎勵した、従て校舎の狹隘校具の不足を告げ自然設備の改良を要した是れ當然來るべき順序である、今や地方に於ては教育の内容實質の進歩改善に向て大に研究を盡して居る時代である其の眞面目と熱心とは都會のもの、想像しがたき程である今や戦後の教育に對する準備等初等教育の前途は種々の重要問題が横はつて居る此際視學の實際執務に改善すべきものあらば宜しく刷新を加へ益教育の効果を奏したいと思ふ。

安 部 榮 重 君

既に前諸君に於て大概私の思ふ所を述べ盡されたこと故簡単に所感を述べん、女子の獨立主義と云ふ事は無論存在して居らぬと云はねばならぬ、賢母良妻主義は一般の主義であつて大體は是にて言ひ盡して居る、併し是には大に語弊があるために特更に之れに意味をつけなければならぬやうになる或人の演説の内に生れつき容資の醜なるものは獨立自營的の考でやるがよいと言つてあつたが全體美醜と云ふものは客觀的に決定の出來ぬものであつて其標準に困しむのである、人間に夫婦といふことのあるのは自然的のもので特更に賢母良妻主義などと大業に言ふのは甚だよくない今日に至り特にかやうな必要が出來て來たかと思はれるそれに賢母良妻主義とか云ふ語の意味にはなんだか女子は無限に男子に服従すべく全く自爲的精神はなくてよいやうに聞える之れは甚よくない女子とても無論或範圍内に於ける獨立自爲的精神がなくてはならぬそれだけでなくは實際眞の賢母良妻たらしむることも出來ぬそれで私は女子教育の要旨は善良なる品性ありて常識に富み最も實用的にすべしと言つて置かうと思ふ何の主義かの主義といふことは寧ろ不適當のことであると考へる。

矢 野 太 郎 君

自分は蓋し年長者の故を以つて只今此教育茶話會の名譽なる幹事に推選せられました但し甚だ不適當とは存じますけれども推選せられては辭する事が出來ぬ規則だそうですから難有御受けをする事に致します。

扱て私は女子教育に就ては未だ全く経験がないから御話を申す事がないが幸ひ今夜は郡視學の方々が居られるから一ツ御相談したい事がある、其の御相談申したいと云ふ題は少し大きいやうであるが日本の國力増進の一策とも云ふものである、題が大きいから法螺でも吹くのではないかと思はれるが内容は極めて眞面目な話で決して六ヶしい事はない行へば直ちに行へる話である、それは外ではないが今や日本の土地に於ては極く北の端と極く西南の端をを除く外、日本全國殆ど開墾をせられざる土地はないと云ふ有様であるが、扱て一方の方を見れば日本の人の上に於て開墾が行届かざる民族があると云ふ事を考へて居る、それを開墾すると云ふ事は日本の國に富を増進する事に最も力あると思ふ、夫は即ち新平民の開拓である、所謂昔に於ては穢多と申して居るが此昔の穢多今日では一般の平民となつて居るが勿論都會に於ては既に普通人民と混和して居るから問題にもならぬが田舎に於ては現に先頃『教育界』の茶話欄に見えましたが、兎角普通人民と所謂新平民とを區別する風があつて充分融和されて居らないと云ふ事を聞いて居る、吾々の経験に於ても田舎に於ては今日新平民と云ふものは普通の人民と充分融和されて居らぬと云ふことを認めさうして學校に於て成程普通の人民と新平民とが同じやうに取扱ふ事になつて居るが何分遠慮がちになつて兎角學校に出ぬやうな有様である、是は御相談であるが郡視學の方が大いに骨を折つて貰ひたい、郡視學の方々は多く既婚者であらうから、不必要かも知れぬが或は子か娘があるかも知れぬから新平民と結婚をさせる事、又小學の教員にして未婚のものがあるならば成るべく勸めて新平民と結婚をするやうにして貰ひたいさう云ふことになるが勿論神の如く尊崇を受けて居る教員諸君の事であるから是を見て一般普通の人民も自ら所謂新平民を輕蔑せぬ様になり一般普通人民と全く同じ様に位置が高まる、さうすると吾が邦一般社會に融和せざる國民の分子がないやうになるから是は日本國力を増進する事に力あることであるまいかと思ひます。

大 熊 實 三 郎 君

新平民との結婚問題に就ては、私は學士方から率先して御實行になるが至極妙であると思ふ。御提議に對して一言致します。

次に女子教育に就ては種々御高説を承りまして裨益を受けましたが此問題に關しては眞面目の研究を望む次第であります主義を標榜し主張を鼓吹するものは間違の起らぬ様にして欲い或る意味から云はゞ學者の用ゆる語は一種の方言的のものであると云ふことが出来る之が爲に眞正の意義が分り兼て却て其弊に堪へぬことがある様である例へば賢母良妻と云ふは標準が立ぬとか舊來の主義とか意味が狭ひとか考へて獨立自營と云ふことを加味して説くものがある現に之が爲に獨棲を主張する女子を目撃したことがある是れ説く者の罪でなく聞くもの、惡しきである一が陥り易き弊と感ずるのである、昔から主義と云ふものは中庸を得ぬ片寄つたもの、様に考へらるゝ故に主義の異同を立て、女性を驅りて一生の不幸を蒙らしむることなき様にして貰ひたい、獨立自營を鼓吹すると女子を高慢ならしめ虚榮心を増さしめ易しと思ふ、私は寧ろ必要ありとせば營業的陶冶とでも申すべきか職業の貴き労働の神聖なることの能く分りて着實の思想の起る眞面目の教育方針を望むものである女子は稟性自然に機能の點心的發達の状態等男子と同じからず女子の本分は自ら明かなるものである樋口先生の賢妻良母に關する説き方は感心して賛成を表すので

ある要するに私は社會に向て女子の人格を重んずるの風習を進めて墮落問題などを聞きたくなく又折角發達しかゝりし女子教育に一頓挫を來す様な教養上の偏見や地方人士の疑惑を起さしむる様なことのない様に望むものである。

片 山 元 造 君

實は今夕出席致したのは諸君の御高説を拜聴したいと云ふのが主なる目的で副二の目的としては田舎からたまに出て來たことであるから田舎漢の寐語として花の都で一ツ大氣燄を吐き賢明なる諸君の高評を乞ふ考でありました併し最早時刻も大分遅くなりまして問題外に涉り十分に愚考を述ぶる時間がないからそれはやめにして極く簡単に今日の問題たる女子教育の方針と云ふ事に就て平素考へて居る事を一寸申上げませうさて、

昔から女子と小人は養ひ難しと云ふて居るが成る程と合點が出来る前回には男女交際の利害、今回は女子教育の方針と云ふ事です是等の問題が現るゝのを以ても十分證明して餘りありと云つて可なりである是等の問題は吾人の立場より見て随分講究すべき價值があると考へらる先刻から色々諸君の御説を拜聴して大いに得る處がありました、今晚は曰く何主義曰く何主義と随分主義流行でありますから私の云ふ所も所謂主義と云ふ名を冠するならば實用主義と云ひませうが實際主義と云ひませうかそれは何れにしてもよいが兎に角女子教育の方針に就ての先決問題は女子教育の目的であらうと思ふ、一體教育をする目的は何んであるかと云ふと社會の實際に適應し實用に立つやうな人間を作り上げる事と考へる、即ち現時及び將來に於て國家社會は如何なる事を要求するかと云ふ事を先づ第一に考ふべきであるこれさへ確立すればそれより打算して行けば女子教育の方針も自ら定まる、私は是から本問題に就て少々具體的に申述べて見やうと思ふ、御承知の通り日露戦争に於ては連戦連勝で誠に結構であるが此大戦争の爲に我が國の有爲なる處の壯年が或は戦死し或は不具者となりたるものは實に萬を以て數ふることが出来る國家は之れが補充を要求するのである之を補充するには健全なる國民を造るより外に途はない、然るに健全なる國民を造る事は決して男子一人で出来るものでない其一の要素は母である、それで心身共に健全なる女子を要する事は即時勢の然らしむる處である其方面からして女子の教育を如何にせねばならぬかと云ふ事になるがそれには第一に男子の様な丈夫なる立派なる身體を女子にも持たしめる事を一の條件とせねばならぬ、モウツは今日の社會の人の嗜好と云ふものは高尚でない物質的であると思ふ高尚なる嗜好純潔なる精神と云ふことは男子のみの責任でない女子にも其の責を持たしむべきである女子は一家の主婦になる事であるから其精神を純潔に嗜好を高尚ならしむるやうにしなければならぬ現社會の狀況が之を要求して止まないのである、次には此女子教育の方針上緊要なる要件として見るべきは一般の仕事をして下女的ならしめよと云ふ事である、成る程今日の女子は話もよくする、本も讀める又能く人との掛合なども上手である、又中等以上教育を受けたものは外國語も話すと云ふ風で所謂男女の交際にも長けて社交上には抜け目がないのである併し極手近い處に於て世の批難を免れない事があるやうに感ずるのである、或は少數者ではあらうが……一例を擧げて云へば本年三月であつた、某處の女子教員養成所の入所試験問題に斯様な問題が出た、赤飯の炊き方を述ぶと云ふのが出た處が大分まごついた人があつた様である中に

も或る女學校の卒業生であつたが其人の書いたのに私は赤飯を食べた事は幾度もあるがイツも下女が炊いたものを旨い々、と云つて食べるのみにて自身が未だ炊いた事がないから御耻しい事ではあるが分りませぬ是から勉強して赤飯の炊方を知るやうにすると云ふ様な書き方であつた作文としては所感を述べて居るから幾らか點を得られやうが若し家事か理科か答案としたならばゼロである、斯う云ふ人は缺して少なくないと思ふ、それで女の教育は極く下層の下女らしい仕事を修得させなければならぬ、假令自身に手を下してやらぬにしても實際の仕事を知らなくては己れの召使を實際に支配して行く事は出来ない、心服しないと云ふ結果になる之れが即下女的ならしめよと云ふ所以である、次に今一つの要件としては是非共男女共稼ぎと云ふ風にしなければならぬ、此共稼ぎと云ふ事は現時社會の状態では下流社會では餘程行はれて居るだらうが中流以上になるとさうでない、私は女子の獨立自尊と云ふ事は賛成しないが女子をして男子の協力者たらしめよと云ふ事には賛成である男女共稼的にしなければならぬと思ふ、この精神がなくその實が擧らなくては到底一家の繁榮一國の富強は望まれない、少しく遠い例ではあるが今度の日本海海戦で大分世間に知られた彼の日本海の一孤島たる見島は私の任地區域の中で私の視察範圍の一部である、三百ばかりの人口を有する極小島で以前は随分疲弊して負債も少くはなかつたが近來は負債も償還し大分活氣を帯びて教育の事なども内地に比して少しも遜色なく却つて或點に於ては優りて居ると言て宜いやうなものである同島の風たる男女共稼の一事は確に現状を生み出した原因の一であらうと思ふ同島の常業は主として農と漁とであるが女も盛に之をやりて居る夕方蝮や蠓を捉げて濱邊より歸り來る有様は實に勇しいもので其の體格の丈夫なる事は感心の外はない何はとも角男女共稼は人間生活の美であると云つても差支はあるまい身分の貴賤職業の如何に拘らず、よし事を共にする事は出来なくてもその精神を共にする事丈は……是等は研究すべき十分の價值あるものであらうと考へる以上四ヶの要件は女子教育を施す上につきて有力なる要件であると信じます。

山 田 忠 君

私は長崎縣から來て居るものであります。先程より大分色々な御説もありましたが、其言葉が違つたのみで、其意味は格別の違ひもない様に思ひます。固より女子教育の方針に於て、種々に議論の別るべきものではありますまい。それで私は本問題に就きては、自分の説を陳ぶる事を止しまして、地方の状況でも陳べた方が宜からうかと思ひます。併し地方のものが地方の事を述べるのは却て興味をそぐ嫌もありますから、これも止しまして、九州のはてなる田舎もの、眼に映じたる東京市を二三述べて見やうと思ふ。

先づ有形上より申しますと、東京市は文明的設備が他の市より遅れて居る。即ち水道でも電燈でも電車でも、他の市より大へん遅れてやつとの事に出来たのである。又水道は只今では完全した様なものであるけれども、下水工事は出来て居ない、どぶ溝を唯一のものとしてゐる。薬は飲め他の衛生の事はどうでも宜しいといふが如く、下水工事の完備せざる間は水道の如何に結構に出来ても、其機能は充分とは云はれない。市二百萬の人口を控へ殊に皇室の住まはせらるゝ所に於て、此の下水工事の出来て居ないのみならず、未だ何たる話をも聞かないのは、如何にも不思議

議千萬に映ずるのである。

更に又教育上に於ては、市には従来視學といふものを置てなかつた。市視學を有せざる市長は、何を以て市教育を處理監督せしか、なるほど市長市參事會が斯道の事に當りて行届くべき人物なりと申ても、市設置以來市視學を置かなかつたのは、是れ又田舎眼に映じたる不思議の一である。併し過日市の視學も出來たれば、是れより著々監督の實も擧がるであります。

田舎眼に映じたる市の缺點と思ふことは、教師の態度である。市の教師には餘り多くは接せないけれども、聞く所によれば、教師として最も必要なる普通の知識と心理學倫理學教育學及教授法などには、全く重きを置かないで、動もすれば或る専門の學科を修むるもの多くはあるまいか、専門學科を修むるは勿論必要なれども、これが爲めに己れの管理する學校若しくは己の擔任する學級の爲めに計ることが疎かになりては、甚だ宜しくない事である。自分の學識を高むると云ふことのみなるは、教育實務者の甚だ取らざることである。東京市の如き學問最高の府として大學があり、大學の教授先生方は多く一科専門の學者であるから、同じ教師の流れを汲む所の小學教師に至るまでが、知らず識らず大學教授を標準として専門に流れて行くことは、不得止次第であるけれども、是れは普通教育の爲めに甚だ宜しからざる現象である。

人は各職務を研究する事が義務である。職務を全ふするは最も尊ぶべき事である。それで我々教育者に於ては、先づ教科書の研究である。次に如何に授くべきかの研究である。尚進みて己れの學識を長じて行くと云ふ事が、我々地方教員の取りたる方針である。我々は教師の職務を此通りに感じてゐたが、東京市に來て聞たら實に意外で、皆學者先生を以て任せらるゝ、それで、我々地方人の頗るあやしむ所で、知識の足らざる所か知らざれども、東京に來て驚きたる是も一の現象である。

其他進で中等教育の事に就きて云はゞ、女學生の華美なること墮落せること、中學生の不規律なること、私立學校の監督不行届なること、學校衛生の充分行れて居ない事など、田舎眼には豫想外に映ずるのである。其他臚列せば大分ありますけれども、私ばかりの時間ではありませぬから、先づ是位で止めて置ませう。

安 家 重 政 君

最後の五分間を借用します。明治座で昨今興行中の鎌倉三代記北條時政の息女時姫の人格を其臺詞から覗つて見ると、たしかに女子教育の方針を示して居ると思ふ、其親をすてゝまで眞の戀愛を提げて慕つて居る三浦の介の再度の出陣を切にとめて居たが遂に『もうとめやせぬゝゝゝ』と武士の名譽を全ふせしむべく情を壓へた點だの、忍びの緒をきり香をたきしめたは、うち死の御覺悟と武士の作法から、夫の心中を洞察した點などは、たしかに良妻たるの資格に叶つて居ると思ふ、眞に夫に同情し夫を了解することは良妻第一の資格で延ては賢母とも良姑ともなるので、是さえあれば其他の事は何のござさもない、必要次第で半年かそこいらかゝれば大概は間にあふものだ。是は昔の思想だけれども猶今後幾十年の後までも動かす可らざる大主義として存すべきであると考へる。次に有力なる教育雜誌『教育界』に記者諸君に望むのは教育者優待論の鼓吹である、それは俸を増せとか爵位を與へよかいふそれ以外に目下の問題としての

教育者優待である、今や吾々は空前の大戦捷國民として、日々日比谷原頭に祝捷行列の國旗提灯の影を見ぬ日はないといふ有様ですが、其原因が教育にあるといふを聞くと共に、其教育に直接たづさはつて居る教員中に妻子眷族を残して従軍して居る人があり、さうして是等の人々で全く俸給に衣食して居た人も少なくないと云ふ事を思ひ出すのである、常に餘財を積むまでの待遇をうけないものが、一朝召集に應ずれば其妻子眷族の衣食の資は何處から來ようか、勿論遺族の扶助といふ事は行はれて居るが、戦捷の因をなしたと言はるゝ教育者の家族が、博愛家の慈惠愛國者の義侠に待たねばならぬとはあまりではないか、府縣や國庫で俸給を支出せられて居る人々は休職中も軍より受くる所と俸給との差額をうけるの權利を得た人が多いが、さて町村殊に時局のため緊縮せられたる町村經濟では容易に出來難いのである、全國での數から云へば極めて少數であらう、然かもしよ一人でも二人でも五人でも十人でも眞にぞんねんの次第ではありませぬか、演習召集などの短期の場合は別として此非常の際に身命を捧げて活模範を示せる教育者は忽ち俸給の支給、或人の爲には一家衣食の唯一の泉をからされて他の恩惠の給與をうけねばならぬとは眞にあまりの次第ではありませぬか、國家は是等の人々に當然其俸給又は差額をうけしむる様にはせられぬでありませうか、昨今の新聞では講和問題がもちあがつたらしいですが果して平和が克復せられますれば、殆んど過去の問題の様ですけれども、教育者優待の精神より是非諸君の御一考を煩したいので、茲に最後の數分間を拝借した次第です。

\* \* \* \* \*

話は益々盛んで盡きなかつたが、時刻が既に十一時を報じたので、散會することゝなつた。尚ほ、吾輩の離席した間に、佐々君始め二三君の有益なる演説を聞き落したことは、今回も讀者に對してお詫びを申さねばならぬ次第である。

~~~~~  
左は教育茶話會第四會の當夜、森次太郎氏より金川の許に缺席の通知と共に寄せられたる書翰也。

## 青年男女の交際について

森 次太郎

金川君貴下

今回は自ら出題者でありながら止を得ざる用事の出來し爲め參會するを得ざりしは遺憾千萬に存じ候何も申上ず候ては相濟ずと存じ候まゝ、左に少しく愚考を申述て御詫申上候。

申す迄もなく世の中は男子と女子と相集りて成れるもの、剛柔兩性の相會して調和宜しきを得ることに候得ば單に理論の上より云はゞ青年男女の交際とて何の不思議も不可もなきことにて問題とするに足らざる事なるべく候唯我邦には特種の習慣ありし爲め社會事情を異にする爲め問題

となる譯と存候。

世上稀に男子計りの家あり又た女子計りの家あり孰れも單調殺風景なるは我れ人の共に知る所にして社會上に於ても同様に男子計り又は女子計りの集會は單調の嫌あり候然るに或る危嶮の爲め男女席を共にする能はざるは人間の弱點寧ろ耻づべき事と存じ候而して是は我邦に於てのみ西洋にては然らずとありては猶更の事に候。

我邦婦人の餘りに軟弱にして或は男子に欺かれ易き或は男子を助くるに堪へざる、我邦男子の餘りに武骨にして動もすれば、言語舉動の卑野なる、剛柔兩姓の別々に存して互ひに接觸せざる故にあらざるなきか、藝妓なるもの、社會上に存在する純なる男女交際のなき故にあらざるなきか、特に重大なるは婚事問題なり、我邦に於て離婚の多きは他の事情にもよる事あらんが互ひに相知らずして所謂『黒蓋結婚』を爲すが故にあらざるなきか、凡そ男女共に結婚すべき年齢に達したならば相當の見識あるものと云ふて可なり然るに一生の苦樂を共にする配偶を選ぶことの當の本人より始まらずして他より話を始めるなど勿論おかしき事に候而して是れ必竟青年男女の交際なき故に候。

青年男女の交際と云へば動もすれば若い男女同士が勝手に會談したり勝手に散歩に出たり芝居に行たりするもの、如く思ひ誤り勝に候へども然ることは西洋諸國にてもなき事に候ふり分け髮の少年時代よりの親しき間柄とは云へ年頃の婦人は妄りに男子の室に入らざるは申す迄もなく愈よ結婚の約束成立したる者か何かに非ざれば男女の會談は必らず座敷に於てし決して婦人の室に入ることなく候下宿樓上に青年男女の會談などは素よりあるべき筈のものに無之候。

小生は青年男女の交際の行はる、を望む一人に候然れども之が今日の我邦の社會にて口先や筆先にて獎勵すべきものなるや否や頗る躊躇するを得ず候西洋にては教會は男女交際の一機關なり文藝會、音樂會もその機關なり然るに我邦にはまだ此種の機關殆んどあるなきに藝妓なるものは男子の玩弄物として存し左なきだに低き我邦の婦人の品位を損じ居る現状にては青年男女の交際の謹しむべきは云ふ迄もなく候然れど危険なりとし現状に甘んずる譯には行くまじく此所教育家の苦心考量すべき所徐ろに女子の地位を高め家庭及び社會の状態を改善し青年男女の交際ありて危険なき時の來るを望ましく存じ候草々不備。(五月十一日)

『教育界』第四卷第拾號

## 教育茶話會記事 (第六回)

小笠原均

毎年十一日は教育茶話會の例會日であるが、今回は何處か涼しき場所をといふので、下谷日暮里の佐々醒雪氏邸宅に於て開會する事となつた、日は西山に白つく頃おひ、續々同邸に參集する

もの十有五名、例に依つて其の顔觸を示せば左の通りである。

|               |               |
|---------------|---------------|
| 文 學 士         | 佐 々 醒 雪 君     |
|               | 石 川 松 溪 君     |
|               | 加 藤 駒 二 君     |
| 東京市學務課員       | 吉 田 升 太 郎 君   |
| 東京市小川女子小學校長   | 松 田 茂 君       |
|               | 曾 根 金 川 君     |
| 前富山縣師範學校教諭    | 大 井 民 吾 君     |
| 英文『日露戰爭記』記者   | 藤 本 武 猪 君     |
|               | 樋 口 勘 治 郎 君   |
| 文 學 士         | 常 盤 大 定 君     |
| 東 京 府 視 學     | 御 園 生 金 太 郎 君 |
| 文 學 士         | 阿 部 莊 二 君     |
| 東京府立第一高等女學校教諭 | 市 川 源 三 君     |
| 文 學 士         | 矢 野 太 郎 君     |

一同先づ紀念の爲めにと庭前に出て、撮影し、終つて席に就くや、間もなく夏向きの晩餐は陳列せられた、此の時一同は起立して、樺太占領を祝すべく、松田氏の發聲で、帝国萬歳海陸軍萬歳を三唱し、臆て箸が採らるゝ、盃が動き出す、談論が始まる、笑聲が聞えるといふ有様であつたが、暫く經つて幹事から將來は時々本會の意見を社會に發表してはどうか、御異存なくば先づ小學教員待遇問題を調査しては如何と、一同に諮つた此の間に佐々君や吉田君等の賛成意見が出て、遂に左記七名の委員を擧げて、其の調査を托することゝなつた。

松 田 茂 君 樋 口 勘 治 郎 君 御 園 生 金 太 郎 君  
吉 田 升 太 郎 君 佐 々 醒 雪 君 市 川 源 三 君  
曾 根 金 川 君

次に矢野幹事より今夜は五分演説を止めて、有志演説を願ひますと、報告があると、松田君は聲に應じて起つた。

松 田 茂 君

チョイト御挨拶を致しますが、私は今度神田の東明館の傍の小川女子尋常高等小學校に轉任致すことに成りました、ドウゾ御通りがかりの時には、御寄りになつて御茶でも召上つて下さるやうに願ひます。只今御話が出ました教員待遇問題は餘程研究の價值あるものと思ひますが、私はチョイト同じ問題で考へたのは、戦後の教師はドンなものであるかといふことです、これはチョイと想像が浮びませぬが、併し是を判斷するには、日清戰爭の終つた時、ドウであつたかと云ふ事を考へて見ると聊か分かることと思ひます。尤も其の時にはそれ相應なる種々な事情がありましたらうけれども、大體は似て居るから、日清戰爭後の小學校の有様を考へ起して見たならば、大體が分るであらうと思ふ、そこで日清戰爭の濟んだ時に先づ最も直接に感じたのは物價の騰貴

でありました、それは経済學上の六ヶしい理論もあらうが、先づ一言に言へば、貨幣の價値が下がつたので、物價の騰貴を見たのであります、物價騰貴に就ては苦しむものは、イッデも薄給のものである、薄給のものは左なきだに、其の日の生活に苦心して居るのに、物價暴騰となると餓死しなければならぬと云ふ事になる、それ故日清戦争の後には小學校教師であつた人々が、皆な巡査になるとか會社員になるとか云ふ有様であつた、何れも教員を止めやうとするやうになつたから、教育界に於ては教員の缺乏と云ふ事になつて來た、夫れで仕方がない、今度は教員の優遇と云ふ事を唱へるやうに成つて來て、其の頃自分は一年に二回増俸を受けた事がある、又或は一級を飛ばして昇級した人もあると云ふ風で、其の時の方針は如何にしたならば法令に抵觸せざるやう俸給を上げ得らるゝかと云ふ事を考へて居る有様であつたから、俸給の外に年末手當金と云ふ名義で、月々一定の額を貰つて居つた人もあつたと云ふ譯で、其の外に於ても、法令に抵觸せざる限りに於て、優遇の途を圖つて居つたと云ふ風で、段々待遇をよくすると云ふ事を唱へたのである、それ故段々人才が教育界へ入るやうになつて來た、さうなると又増俸を止めて仕舞つた、それから人才が外に出て仕舞ふたのである、さうして世間に於てはドウも教育が奮はぬ、此れは教員の俸給が低い爲めであるから、教員の俸給を高めて人才を入れなければならぬと云ふ事であつた、そこで一方には教員養成所が起つた、其處でも此處でもと云ふやうな風で、一時又自然に人才が流れ込むやうになつて、教員が溢れて來た、ところが今度は戦争が初まつたから、段々恐慌を來すやうな傾向である、それで日露戦争は平和の後ドウなるかと云ふと、日清戦争のやうに、金の價値が下がつて、物價が騰貴するに違ひないと思ふ、今日の官報を見ると、又公債を募集する事になつて居るが、亞米利加などでは平生金利が二分五厘位のものであるのに、五分か六分の利であるから必ず應ずるのであらうと思ふ、外國の金が這入つて來ると、金の價値が下つて物價が騰貴するから、又恐慌を來して朝鮮に行ふとか、支那に行ふとか、或は實業に方向を轉ずるとか云ふ風になつて、其の次には又教員優遇と云ふ問題が出來て來ると云ふ事は、矢張り順序であらう、夫故に只今に於て斯う云ふ問題を決定すると云ふ事は、初めは物笑ひにならうけれども、頓がては世間からさすが名士の會合であるだけに、談笑の間にも斯う云ふ事が分つて居つたかと云ふ事を知つて來るだらうと思ふ、先づ私の感じた一端を述べれば斯の如くである。

加藤 駒 二 君

私は一年半ばかり上海に居りましたから、自分の目に觸れ耳に聞えた事の一部を御話し致します、若し御参考に供する事が出来るならば幸でござります。

上海と云ふ處は、私が申し上げませんが、既に御分りになつて居る事ですが、日本とは一帯帶水、長崎を出帆すれば、早きは三十時間、遅きは四十時間ばかりで着くのである。先づ黄浦江を這入つて行つて見ると、立派なのは赤練瓦で造つたところの郵船會社の建物である、是を見ると日本人の勢力の偉大なるを感ずるのである、夫から海岸の方に行つて見ると、日本で云ふ川岸通りと云ふやうなところで、そこには英吉利の租界がある、其の次には堀を越えて佛蘭西の租界があり、其の先きには支那の南市と云ふところがあり、其の對岸には先般武装を解かれた露西亞の軍艦アスコルド、マンジウルなどが居る。

夫れで上海は支那の中にあるけれども、萬國の人が寄つて居る處であるから、上海は萬國が經營して居るのであつて、眞正の支那の上海と云ふ市街は、其の隅の方の一部分にあるのである、又居留地は三ツあつて、一ツは亞米利加、次ぎは英吉利、其の次ぎは佛蘭西の居留地になつて居る。亞米利加と英吉利とは今を去る十數年前より、合してインテルナショナルセツツルメント、即ち共同萬國租界と稱して、共同政治をやつて居るが、此の場合に佛蘭西の租界はドウ云ふ譯だか這入らなかつた、即ち佛租界と申して別に行政の組織を立てて居る。

佛租界に隣りして楕圓形の城廓がある、それが支那人の街で、即ち上海城内である、此の城の周圍は、煉瓦塼であつて、南門、西門、新北門、小東門、大東門などの入口がある、一番宜い處は小東門から這入つて行つた所であつて、是から這入れば先づ東京で云ふと銀座通りのやうな所である、其の中に這入つて見ると、リツパに花崗石などを敷いて居りながら全體はお話の出来ない程汚ない。

又其界の方は、歐羅巴でも中等位であるが、悉くではない、或は英吉利の租界、殊に亞米利加の租界の如きは、三階や四階の家が軒を並べ往來はコンクリートなどでかためて居る、東京は、此の頃電車市街鐵道が出來、夜などは、歐羅巴の市街のやうに見ゆるけれども、屋の低いのと、雨後道路の悪いのは、上海に劣る、何ぞ上海で外國の居留地に支那人が澤山居るかと云ふと、支那政府の下にあるよりは、生命財産を安全にする事が出來ないから、此の中に這入つて居れば安全であると云ふ處から、多く住つて居るのである、夫れで共同租界に住する者の負擔すべき税は屋賃の一割で、先づ五百テールの屋賃を一ケ年に拂ふものは、其の一割即ち五十テールづつ出すと云ふ事になつて居る、一年に五十テールの税を納むる者は選舉權を有し、一年百テール拂ふものは、被選舉權を有すると云ふことになつてをる。

それから教育の有様は如何であるかと云ふと、萬國共同の公立學校がある、是れは大概是外國人が教へて居る、生徒も外國人である、獨逸も同じやうな方法で教へて居るが、日本人の教育を受けるものはドウして居るか云ふと、本願寺の別院が學校を設けて居つて、開導小學校と唱へて居る、而して其の校學<sup>(ママ)</sup>の生徒は、七十人位であるが、未だ卒業生も澤山はない。

要するに、日本人を教育する組織は聊か遺憾の點がある、居留民の數から言へば、第一を占める處の日本人が、一ツの立派な小學校を持たんのは恥かしい、獨逸の居留民は千二三百人でありながら、リツパの學校を新築することになすつて居る。日本の方でも、近頃小田切總領事はじめ有力者間に於て、一ツの學校を立てやうと計畫して居るが、これも未だ將來の話で、今の處居留民の有様を見ると、實に心配のもので、ドンナ教育を受けるか分からぬと考へて居るものが多い、日本から行つて居るものも、今の所では教育を充分受けることが出來ない、今の處で同地居留の一大缺點は教育機關不備のことである。

ドウか宜い學校を拵へて、充分善い教育を受けさせる事が出來ると云ふ風になつたなら、永住すると云ふ考も起り自然國力の扶殖も出來る譯故其の改良の事は、文部當局者にも考へて貰はんければならぬ、居留民の仲間相談に放任し置くべきことにあらずと思ふ。

ドウか上海の日本人教育は、十分改良して貰ひたい、永住するものがないと云ふ處から、支那

の商權を充分に得る事が出来ない譯になる。マダ話し度い事もあるが、餘り永くなるから、是れ位にして置ませう。

御園生金太郎君

義務教育の効果が甚だ薄弱であるとは、世間で口喧しく唱へるところであるが、徴兵検査の際に於ける學力試問の情況などに照して見ると、此の問題の起るのも無理でないと思はれる、今單に文字の有無に付て云ふと、尋常小學を卒業した丈けのものでは、やつと自己の姓名がかける位のもので族、籍住所の滞りなく書けるのは、補習二年位を修了したものでなければ覺束ない、手紙の書けるものは補習二年位を修了したものでも少數である、尤も此等は文字の學習に伴ふ精神修練上の價值をしばらく度外視して、單に文字でふ實驗其の物に付ての論ではあるが、かゝる情況から世間が義務教育の効果を疑ふのも全く理由のないことではない、併しながら又一方から調査して見ると、尋常小學を卒業したのみの壯丁に文字の有ると無いとは、卒業後の職業の種類に依る様である、前の全く文字が無いと云ふのは、多くは農業地の壯丁の事で商業地の壯丁若くは家業が商業に關係したものであると、尋常小學を卒業したのみの壯丁でも、かつかつ文字がある様に見受けられる、して見ると、壯丁の文字の有無は義務教育の効果如何の問題として見るよりは、寧ろ其のものが卒業後文字を要する情況にあつたかなかつたかと云ふ問題に歸着する、即ち現在に於ける多數の農民は平素文字を要することなしに世渡りして居るのである、學校で教へられた様な文字は學校でばかり教へられるので、一旦校門を離れてからは之を知らないでもどうなりかうなり渡世ができるから、一向にふりむきもしないといふ情況であるのである、此の如き性質の教材を以て教育材料となすときは、たとひ義務年限を五年にしても六年にしても其の効果の薄弱なことは今と同様ではあるまいか、然し是れは申す迄もなく現在の壯丁に付ての論で、即ち十數年以前の義務教育を受けた兒童の事で、云ひ換ふれば其の時代の義務教育は、國民の多數を占むる一部の國民に向つては卒業後使用することの稀なる實質を教授して居つたのである、其の時代の教育の効果が、今日に顯はれたものである、それから今日に至るまでの間には教育の制度も改まり、教材の選擇、文字、文體等に於ても非常な變遷を経て居るのであるが、十數年の後後人の今日を見ることは、果してどうであらうか、是が一つの疑問である。

大井民吾君

私は此席に於て話を持つて居らぬが、何んでも宜いと云ふ事であるから、チヨット人から聞いた話をする、ドウ云ふ事であるかと云ふと、先づ私の記憶では、世間に毎日働くにしても、暗い處ではいかぬ、明い處でなければならぬ、朝から晩迄太陽の光に當つて居ると餘程藥であると云うやうに承知してをつた、日光に當らなければ長命を得ないと云ふて居つたに、此の間私に向つて不思議に感じられることを云ふた人がある、それはかういふ話で、一番に證據の一つとして擧げるものは、他の動物は明い處よりは、暗い處に居つて長命して居る、又歐羅巴の白人が、熱帶地方に行くと、病氣に罹ると云ふ事である、是等の點から見ても太陽の光線なるものは、如何に害があるか分からぬ、又亞米利加人で非律賓などに行つて居る兵隊もさうである、是等は大概非律賓に彼等が二三年後とに歸つて來ると、記憶力が減つて居る事を感じるのである、是等も太陽

の光線の爲めである。それから熱帯地方のものがナゼ黒いかと云ふと、是は光を防ぐ爲めの自然の保護から來たものであらう、テあるから白人種でも熱帯地方に行つて健康を保つものがドウ云ふ顔かと云ふと、顔の黒いものが健康である、皮膚の白いものは健康を保つ事は出来ないさうである、それから醫者の方から云ふと、明い處に於て教育された子供が痴鈍であると云うて居る、段々委しい調査に由ると、矢張り餘り明る過る處に居ると、多く痴鈍になると云ふ事である、兎に角過度の光線は害がある事が慥かである、と詰りかういふ話なのである、私は餘程奇體に感じた、其の調査は確實か知らぬけれども、段々聞く處に依れば、亞米利加の醫者の著した本に依つて見ても、矢張りさうであるとのこと、是迄は太陽の光線は利益一方の様に考へて居つたのに、利益より害が多いと云ふ事に至つては豫想外に考へたから、御参考として又研究する價値があらうと考へて、一寸一言述べた次第です。

\*            \*            \*            \*  
\*            \*            \*            \*

演説はこれで濟んだが、話はなかゝゝ盡きぬ、たゞ時間が移つて、時針が十一時を示したので、一同惜しき席を解散することにした。